

季刊

史料と伊能図

一九九七年冬季号

伊能忠敬

研究

「伊能図探究」継承第一〇号



伊能忠敬研究会

表紙図解説（イタリアにあった伊能中図）

高橋景保が、シーボルトに贈ろうとして、事件を引き起こしたカナ書きの伊能特別小図（国会図書館古典籍室蔵）はよく知られている。甲南大学の久武教授から、イタリアの地理学協会にもカナ書きの中図八枚があることを聞き、同教授の紹介で、九六年十月八日、実見調査をすることができた。

八舗の構成は学習院大学蔵の伊能中図と全く同じである。表紙図は奈良盆地の部分で、測線の両脇に地名を片カナで記すほか、国名、郡名もカナである。（国会図は、国名、郡名は漢字）学習院中図にある領主名はない。沿道風景は、水彩画的にごく簡単に山景を描く。城下、宿駅、郡界、寺院、湊、天測地などは手書きの合印がある。方位線、経緯線もあって中図の様式を揃えている。折本八舗。写本で針穴はない。虫、汚れ、傷はなく、保存完全である。

イタリアの初代駐日総領事だったロベッキー氏が集めた日本地図類のなかに含まれていた。同氏の着任は、一八六七年で明治維新の前年である。帰国時期は明らかでない。イタリアの完全統一は一八七〇年であるから、国家統一前後の時期に、日本周辺の情報収集がおこなわれたことになる。同じコレクションの官板実測日本図には一八六九年寄贈の年記がある。

（渡辺）

（題字は忠敬の筆跡）

目次

（表紙写真解説） 目次

私の伊能忠敬体験

佐原例会の報告

講演（佐原例会の講演）

伊能忠敬との出会い

報告

第一回歩測実験について

第一回例会 歩測演習の結果発表

お知らせ・佐原例会の新聞記事

忠敬と茶山

駆け足の佐原散歩

忠敬を題材とすることのむずかしさ

伊能図と官板実測日本地図

史料紹介

伊能家（世田谷）文書紹介

坂部貞兵衛の書簡（三）

源空寺墓碑建立始末

伊能測量の地域史料

測量隊の落とし物

諸侯の依頼による地図仕立て（二）

伊能図探究 一〇

宮城県図書館伊達文庫蔵 沿海地図

イタリア地理学協会蔵 伊能中図

長崎市立博物館蔵 伊能諸図

入会案内・投稿規定・編集後記

山住 正巳 1

香取 禧良 3

小島 一仁 4

岩田 重男 10

編集部 12

編集部 13

武田 威 14

浅井 京子 15

植田 浩一 16

清水 靖夫 16

安藤由紀子 20

伊能 陽子 24

伊藤 栄子 26

渡辺 一郎 28

伊能日本図探究会

30

編集部

私の伊能忠敬体験

山住 正巳

ひょんなことから本会の存在を知らされ、入会を誘われた。少年のころから強い関心をもっていた人物なので、どんな方々がどんな研究をしておられるのか、にわかに興味を抱き、入会せぬこととわる理由も見つからなかった。しかし本原稿執筆については締切り日をとくに過ぎて悪戦苦闘しており、ことわるべきであったと、反省しきりである。

いま「少年のころから」と書いたが、興味をそそられたのは、なんと、教科書の記述によってであった。教科書的といえば味も素気もないつまらぬ文章の代名詞とされ、文学作品でも、教科書にのると味気なくなるといわれるほどであり、教科書はほんものの文化からは遠い存在とみられることが多い。

しかしそのようなものであっても教科書から大きな影響を受けたという人は多い。私自身も例外ではない。オウム真理教事件以来、戦前戦中、日本中がマイルド・コントロールにおちいていたといわれることが多くなった。そのコントロールは何より教育のあり方を、「皇祖皇宗の遺訓」に求めた教育勅語にもとづく小学校の国定教科書によって行われたことは明らかである。

ヨーロッパから渡来の古代ギリシャ・ローマのリベラルアーツに由来する教養は、旧制度の帝国大学・高等学校にとじこめられ、これらの学校を通過した人たちは教育勅語の世界から逃れることができたが、同時に、教育勅語にとらわれたままの、圧倒的多数をしめる他の人たちの考え方を無視し、あるいは理解しようとしなかった。これは戦前

日本の決定的な問題であった。一言でいえば、初代文相森有礼のいう「学問と教育は別である」が具体的な形を取って初等教育の教科書にあらわれていたのである。

では、その教科書で伊能忠敬はどう描かれていたのか。保柳睦美は『伊能忠敬の科学的業績「改訂版」』（一九七四年）でつぎのように書いている。

明治三十六年から文部省で国定教科書が編集されることになった際に、忠敬の業績が高等小学読本四に取り上げられた。これは忠敬の測地上の努力を中心として、かなり客観的によく書けている。しかし、のちにこれが尋常小学修身書に移されるに及んで、その記述の重点が、当時の教育方針に都合がよい面を強調した人物本位のものに変わり、忠敬の真の偉大さを失わせ、スケールの小さい郷土的偉人に仕上げてしまったことは、むしろ遺憾であった。

これはきわめて興味深い指摘であり、教科書の記述を引きながら検討してみたい。

保柳が「かなり客観的によく書けている」というのは、一九〇三年（明治三六）に刊行された『高等小学読本』巻四、第十課「伊能忠敬」である。当時は尋常・高等とも小学校は四年制であり、国語読本は一学年あたり二冊づつ使用されていたので、この巻四は高等小学校二年つまり尋常小学校からかぞえれば六年後期用の読本ということになる。その冒頭はつぎのとおりである。

「学術、いまだ開けず、器械なほ備わらざるときにあたり、わが國の驛路、海岸を測量して、精密なる地図を製し、時の人、後の学者

に、利便を與へたるものは伊能忠敬なり。」

ついで、忠敬の生い立ち、代々酒と醬油の醸造を業とした伊能家の養子となり、家業にはげんで家を再興させたこと、五十歳で家事を子にゆだね、宿願であつた暦字を学ぶために江戸に出て高橋東岡の門人となり、奥義をきわめたことを記した後、

「忠敬、五十六歳のとき、徳川幕府の命を受けて、奥羽、北海道地方を測量し、その後、またしばしば、他の地方の海岸、島嶼などを測量せり。かくて、毎回製したる地図を集め、一大地図を製して、これを幕府に奉りたり。これ、われらが信用すべき地図を得たる始なり。」

つづけてここにいたるまで十八年かつたこと、陸地では徒歩で歩数を数え、海岸ではその出入を縄を引いて里数を計算し、夜は星の位置の觀察によつて各地の位置を定めたこと、を述べている。これらは本誌の読者にはよく知られたことだが、問題は何を選んで、どんな文体で書いてあるか、というところにある。教科書ではつぎに彼の業績と人となりをつぎのように述べていた。

「忠敬の地図の、きはめて精密なることは、次の一話にても知るべし。徳川幕府の末、いぎりす人、我が国に來りて、近海を測量せんことをこひしことあり。その時、幕府これに忠敬の製したる地図を與へしかば、いぎりす人は、これによりて、測量をこゝろみに、その里数、位置など、少しもたがはざりき。すなはち、ただちに、測量を中止し、わが国の、すでに、かゝる精密なる地図を有するこ

とを驚嘆せりといふ。

忠敬、人となり、正直にして、外見を飾らず、氣力盛にして、かつて、困難に屈せしことなし。年七十をこえ、髪、ことごとく白くなるにいたりても、なほ、壮年の人のごとく、陰をこえ、波をしのぎ、風雨、寒暑をおかして、四方に奔走すること数千里、つひに、かゝる大業を成すことを得たり。七十七歳のとき、江戸にて死せり。」

「伊能忠敬」と題する課は、この後、明治政府が追賞したこと、有志の手で東京芝公園に測地遺功表が建てられたことを述べて結びとしている。この記述で興味深いのは、イギリスという外国の人が忠敬の測量調査の成果である地図に接して驚嘆し測量を中止したというくだりである。

これは、何でも無いことのように思えるだろうが、そうではない。というのは、その後の国定教科書では日本人にほめられるという記述はほとんどみられないどころか、次第に外国人を登場させるようになるからである。背景にこのような事情があつたので、こういう記述もまた、「かなり客観的」といわれるものになつていふと思う。

国定教科書以前、子どもたちが忠敬を知るのには子ども向けの読み物によつてであつたろう。その代表的な著作は、博文館発行の「少年読本」第十三編（一八九九年）として出された幸田露伴の『伊能忠敬』である。二宮尊徳、日蓮上人、鄭成功らについても書いており、いずれも露伴らしい力のこもった作品として仕上げられている。

露伴はいくつかの挿話を積み重ねながら忠敬の像を浮かびあがせている。その一つは大好きであつた囲碁を勉強の邪魔になるとして、きっぱりやめたことであり、これについて露伴は

「先生は流石に常人ならざりけり。先生は自己の明らかなる智恵の利害の判断に従って自己の情念を抑へ、常人の為すことを敢てせざる克己の工夫に於て、少壮時代に當りて早くも一步を進めたり。如何なる事業にせよ、やゝ大なる事業は其事業に當れる人の自己の私慾私情に打ち克ちたることのために成就せらるゝものなり。」(全文に振仮名がふつてあるが省略)

といつて、克己の工夫なしに大きな事業が成功したためしはないといふ。(つづく)

(やまづみ まさみ・都立大学総長・教育学)



佐原例会の報告

香取 禧良

十一月十日の伊能忠敬研究会第一回佐原例会は、好天に恵まれて、鈴木市長をはじめ約一七〇名の地元忠敬ファンの参加を得て、盛会裡に終了しました。御協力いただいた会員各位ならびに御後援を賜った成田山仏教図書館、佐原青年会議所、佐原ライオンズクラブに厚く御礼を申し上げます。

三ヶ月前に会場を確保したときは、充分余裕があると思っていたが、ほとんど時間が過ぎてゆく。『地図のまち佐原』のきっかけを作った佐原青年会議所と、佐原ライオンズクラブの御後援がきまって、午前中は地図の展示、午後は講演会、そのあと懇親会と大枠が固まったのは二ヶ月前となっていた。

講師は会員からと、地元の小島一仁先生と渡辺先生をお願いをする。小島先生は、いままで数十回忠敬の講演をしたが、これまで特にふれなかった話をするとのこと。渡辺先生は専門の「伊能図の謎」と題して、OHPとスライドを駆使して話をされることになる。

あとは庶務で、遠方より参加の会員のため市内観光マイクロバスを手配し、ガイドは伊能陽子氏に依頼する。大型ポスター15枚をつくり市内の要所に掲示し、チラシ・DMも配布した。

当日の受付は佐原の会員にお願いし、会場設営は青年会議所に引き受けていただいた。伊能家からの地図持込み、佐久間氏の成田山からの地図借用、齊藤先生の学習院中図持参と順調に予定が進んで、例会の開会に至りました。多数の会員の協力を心から感謝します。

(かとり きよし・市水道事業部長・佐原例会幹事)

九六年度 佐原例会の講演

伊能忠敬との出会い

小島 一仁

日本文化を築いた十偉人

ただいま、ご紹介をいただきました小島でございます。御来場の皆さま方は、伊能忠敬の生涯については、大体、ご存知のことと思いますので、本日は、私が忠敬に関心をもちはじめたから出会ったり、気づいたりしたことを、思い出すままにお話してみたいと思います。お気軽に聞いていただければ有り難いと存じます。

私は、現在、この佐原の浄国寺という日蓮宗の寺の住職をしておりますが、生まれたのは佐原ではありません。八王子です。八王子の小学校を出るとすぐに、旧東京市内の伯母の家にあずけられて、そこで中学・大学時代をすごしました。父は、大正の末年から佐原に住んで浄国寺の住職をしておりましたが、家庭の事情で、私はずっと父母と別れて暮らしていたのです。

一九四二年（昭和一七年）の九月に大学を出ました。卒業式というのは三月と相場がきまっていますが、戦時中だったため、半年くり上げられて、九月二六日が卒業式でした。そして、十月一日には軍隊に入りました。敗戦の翌年、一九四六年の八月に帰還しましたが、八王子の家も、東京青山の伯母の家も戦火で焼けてしまっ行って行くところがありません。それで、しかたなく、父のいる佐原の寺へころがりこんできたのです。そのときから、私は佐原の住民になりました。

戦地から帰還した次の年、一九四七年に、現在の教育制度、いわゆる六三制がはじまりました。このとき、私は、佐原の「新制中学」の

教師となり、その翌年、「新制高校」の発足と同時に、佐原第一高校——現在の佐原高校——に転任したのですが、伊能忠敬先生のおつきあいは、そのときにはじまりました。

佐原高校に着任してから間もなく、五月になると、講堂で、伊能忠敬展覧会が開かれることになりました。これは、旧制中学校のころから、毎年五月に、慣例として行われていたらしいのですが、その準備のために、先日亡くなられた宮沢重義先生と二人で、忠敬旧宅へ行きました。小雨が降っていたので雨合羽を着て、荷車をひいて行きました。旧宅で象限儀や量程車などを借りて荷車に積み、ぬれないように上にシートをかけて、ガラガラと学校までひいてきました。今は文化財になっているのでとんでもない話ですが、当時はそんなことをしたものです。これが、忠敬先生と私の最初の出会いでした。でも、私はまだ忠敬先生に特別の関心を持ったわけではありません。私の頭の中には、戦前の「修身的」な忠敬の偉人像が住みついていて、忠敬をえらいとは思っていましたが、人間的な親しみは感じていなかったのです。

ところが、一九五〇年になって、意外なことがおこりました。突然、毎日新聞社の出版部から、私に、伊能忠敬の伝記の執筆依頼が来たのです。「毎日中学生新聞」と「毎日小学生新聞」の全国の読者たちの投票によって日本の文化に貢献した偉人たちが選ばれたのですが、伊能忠敬が、福沢諭吉や野口英世等と共に、そのベスト・テンに入りました。毎日新聞社では、その一〇人の伝記を『日本文化を築いた十偉人』という一冊の本にまとめることにし、その中の伊能忠敬の伝記を私に書いて欲しいといってきたのです。びっくりしました。そのころ私はまだ三〇才にもならない若輩で、忠敬について研究していたわけでもありませんから——。それに出版計画書を見ると、聖徳太子と夏

目漱石は教育大の家永三郎さん——教科書訴訟で有名な家永さんです——が書く、紫式部は東大史料編纂所の川端庸之さん、野口英世はやはり史料編纂所の小西四郎さんが書く、というように、当時第一線の歴史学者たちが、ずらりと顔を並べています。私は、気おくれがしてしまいました。それで、執筆依頼を一たん断ったのです。

ところが、すぐに、私と同じ大学の先輩で高橋碩一という歴史家から手紙が来ました。彼は、当時、すでに洋学史の研究で知られていて、後には、忠敬や佐原と深いかわりをもつことになりました。一九六八年(昭和四三年)、伊能忠敬翁一五〇年祭のとき彼は佐原高校の講堂で記念講演を行い、また一十年前、一九八五年(昭和六〇年)の五月、忠敬先生生誕二四〇年のときには、この場所ですこに立って講演をしました。で、彼からの手紙には何と書いてあったか。「お前は、佐原の学校で歴史を教えているというのに、中・小学生向き三〇枚の伊能忠敬伝も書けないというのはどういうわけか。それで、佐原の学校の教師がごとまと思っているのか」というのです。毎日新聞社へ私を推薦してくれたのは彼だったのです。これには参りました。それで、とうとう、書かされることになってしまいました。『日本文化を築いた十偉人』は翌年に出版されましたが、私の書いた「伊能忠敬」は、あとになって考えてみたら、戦後最初の忠敬伝であったようです。

伊能家文書との出会い

『十偉人』の仕事にとりこんでいて、私は、忠敬研究に関して、いくつかのことに気づきました。

一九一七年(大正六年)に大谷亮吉という物理学者が『伊能忠敬』という大きな本を書いていて、まだその業績を越える研究はなされていないこと、その後に書かれた忠敬伝のほとんどは、大谷版の引きう

つしであることがわかりました。また、忠敬に関する研究は、物理学者、数学者、地理学者、科学史研究者など、理科系の学者によってすすめられてきて、歴史畑で忠敬研究を専門に手がけた人は見当たらないこともわかりました。それと、五〇歳出府以前の忠敬の生活については、大谷版でも、ほとんど明らかにされていないことにも気づきました。そんなことから、忠敬についての関心が深まり、時おりは、忠敬旧宅に顔を出して、地図等を見せていただくようになりました。

当時、忠敬旧宅には、伊能こうという品のよいおばあさんが一人で住んでおられました。いま、そこに坐っておられる伊能洋画伯の御祖母様です。まだ忠敬記念館はありませんでしたので、見学にいくと、このおこうさんが忠敬の書斎といわれている座敷に地図をひろげたり、測量日記を出したりして説明して下さったものです。おこうさんは、一九五四年(昭和二九年)に八八歳で亡くなりましたが、忠敬の遺品を守り、忠敬の業績を世に伝えるために、大きなはたらきをなさった方でした。

おこうさん亡きあとは、その息子の康之助さんの奥さん、多嘉子さんが忠敬や伊能家先祖が残したものを守ることに力を注がれました。

一九五五年(昭和三〇年)の春、私は、伊能多嘉子さんのご案内で、忠敬旧宅の土蔵の中に入れていただきました。当時金沢大学史学科の学生であった浅野祐さんも一緒にいました。私は、ここで、膨大な伊能家文書と出会いました。棚の上には、「伊能景利日記」「旌門金鏡類録」などの記録類をおさめた桐箱がいくつか並べられており、その下の大きな長持の中には、古文書がぎっしりとつまっていました。まことに、質量ともに驚くべきものでした。そして、その年の夏休みには、当時金沢大学の教授であった遠藤元男さんが、浅野祐さんから数人の学生と共に佐原に滞在して伊能家文書の調査、整理にあたりまし

た。私もお手伝いして、一所懸命カードをとりました。ずっと後に、佐原市教育委員会の高森良昌さんが中心になって、『伊能忠敬関係資料目録』（一九八七年）や『佐原市古文書資料目録』（一九九二年）がつくられましたが、それらは、この時の調査カードを土台としたものです。

私が、伊能家文書から学んだことは、とても、ここで言いつくすことはできませんが、特に、忠敬に直接関することだけを一、二あげておきましょう。

まず、忠敬研究の根本史料である忠敬自筆の書状、『旌門金鏡類録』『伊能豊秋日記』などを、実物ではじめて見ることができたのは大きな感激でした。それと、伊能景利という人物を「発見」したのは忘れられないことです。景利は、伊能忠敬の妻みちの祖父にあたる人ですが、大変な人物です。

伊能景利は、江戸幕府の元禄期国絵図の作製にあたってこれに協力し、佐原村の測量を行い、村絵図をつくって提出しています。また、『部冊帳』をはじめとして膨大な記録を編集、筆写し、特に四五歳で隠居してから数年の間に、その大部分をまとめていることが注目されます。それらのことから、景利が忠敬に多大の影響を与えた人物であることがわかりました。また、忠敬が二九歳のときにはじめてまとめた記録で「佐原邑河岸一件」というものがあることもわかりました。それらのことは、大谷亮吉さんも、全く気づかなかったようです。

なお、伊能家には「家牒」という先祖書きがあります。これは伊能忠敬の前代の伊能長由という人までは同じ人の筆で書かれています。伊能忠敬から現在まで、つまり去年亡くなられた伊能敬さん（第一六代）までは筆跡が変わっています。これはどういうことなのかと伊能多嘉子さんにお聞きしたことがあるのですが、驚いたことに「忠敬か

ら後は私が書きました」と言うのです。おこうさんとおばあさんと呼ばれて、「あなたがこの後は書くんですよ」と言われた。そしておこうさんの持っていた材料を示されて、先祖書きまで多嘉子さんが書いているのです。そういうふうに関心で伊能家の記録が守られて、現在にも大変役立てられているということを特に皆さんにお知らせしておきたいと思います。

小説家と忠敬

そうこうしているうちに、伊能忠敬の伝記を書くようにという依頼が講談社から来ました。毎日新聞のほうはずか三〇枚でしたが、講談社からの依頼は『世界偉人伝記全集』というので、五〇冊のうち伊能忠敬についての一冊を私に受け持ってほしいという話です。このころになると私もいくらか欲が出てきて、断りませんでした。やりましようというので始めたのですが、これが大変な仕事で、一冊書くのに三五〇枚、三年ぐらいかかってしまいました。

講談社の注文は子ども向けということで、フィクションを使っているべくおもしろく書いてくださいというわけです。しかし私は小説家ではないので、そんなものは書いたことがありません。そこで考えたことは、小説家なら伊能忠敬をどういうふうにかくのだろう、そういうものがないかと思って調べてみたのですが、伊能忠敬を主人公にした小説は一冊もありませんでした。主人公どころか小説の中には脇役でも出てきませんでした。

その理由は後でわかりました。それは戦後の一九七〇年代ごろになって、小説家で現在も活躍している井上ひさしさん、亡くなった松本清張さんの二人が同じようなことを言っています。伊能忠敬は人間のおもしろみに欠けるというのです。というのは今は違うと思いますが、

一九七〇年代当時には井上ひさしさんや松本清張さんの頭の中には修身的な伊能忠敬像が住んでいたと思うのです。私がおもしろくないと思ったのと同じような像が、井上さんにも松本さんにもあったと思います。正直なところ、修身的な忠敬像では小説になりません。そういうことがあって、小説家は彼を取り上げなかったのではないかと思います。

伊能忠敬を主人公にした小説としてはいまだに井上ひさしの『四千万歩の男』しかないのですが、その当時はまだ彼にそれを書く気はまるでありませんでした。NHKで脚本を書いて、一度伊能忠敬に目を付けたけれども、案に相違してつまらない人物だったと書いています。それでやめてしまったわけですが、その後、あの人はまた勉強しなおしたのでしょうか。

でも、何か作家が書いたものがないかと探したら、小説ではありませんが、幸田露伴が三回にわたって書いています。まず、一八九三年(明治二六年)に『伊能忠敬翁』という表題の子ども向けのものを書いておられます。それから六年後の一八九九年(明治三二年)に『少年読本・第一三編・伊能忠敬』というのを書いておられます。子ども向けの本だと思えばかにとんでもない話で、文語文で難しいのですが、子ども向けなので全部に振りがなが振ってあります。

これを何回も読み返してみましたが、さすがに幸田露伴だと思いました。というのは、これは国定教科書の前に書かれたものです。国定教科書は一九〇五年(明治三七年)ですが、国定教科書が定まってから後にできた伝記は国定教科書の影響を強く受けてしまっているのです。あまり客観的でない記述が多いのです。やたらに偉人にしてしまうという形です。ところが幸田露伴の場合は人柄もあるでしょうが、国定教科書の前に書かれたということもあって、書き方がかなり客観的です。

たとえば伊能忠敬の小さいときのこと、つまり九十九里の小関という村で生まれて、小さいときに母親に死なれてずいぶん苦労したという伝説があるのですが、たいていの伝記はそれを強調しています。しかし露伴はちがいます。「忠敬先生が幼かったころのことについては三次郎と呼ばれたことのほか、語るべきことはない。先生といえども、幼いときには、ふつうの子どもと同様に遊びたわむれて日々を送っていたのであろう」というように書いています。幸田露伴という人は大したものだと思います。

そのほかに気がついたことは、忠敬という名前に「チュウケイ」と振りがなが振ってあるのです。「タダヨシ」となっているところもあります。それから忠敬の息子の景敬カゲキにも振りがなが振ってあって、「ケイケイ」としてあります。ほかの人物、たとえば高橋至時先生タカハシモトキを高橋ムネトキと書いてあります。現在では伊能タダタカという呼び名が正しいということが常識になっていますが、明治の中ごろにはまだタダタカという呼び名が一般化していなかったのではなからうかというのが一つの発見でありました。

戸籍には現在でも振りがなは振りません。振りがなを振ってしまうと、振りがなを振ったのが戸籍になってしまうのだそうです。だから読み方がわからない名前がずいぶんあります。忠敬の息子の景敬を私どもは「カゲタカ」と呼んでいて、それでいいのではないかと思っているのですが、先年亡くなった伊能家の伊能権之丞さんから伺ったところによると、景敬というのは「カゲタカ」ではなくて「カゲユキ」と呼んだのではなからうかということをおっしゃっているのです。どうも本当のことはよくわかりません。ともかく現在は「タダタカ」ですが、しかしそんな早くから「タダタカ」という呼び名が定着していたわけではなかったのだらうという感じがします。

そこで忠敬を初めて小説に取り上げたのはだれなのかというと、一九七〇年に一色次郎という方が『朔風の鐘』という小説を書いておられます。この方は私より年長で、現在、確か八〇歳ぐらいになる方です。戦後、太宰治賞を受けた作家です。この小説は常陸の谷田部の名主でいろいろな発明をやつては失敗していた飯塚伊賀七という地医師と、伊能忠敬と間宮林蔵の三人を組み合わせて小説にしたものです。どれが主役なのかわからないのですが、読んだ感じとしては伊賀七の娘さんが語るという形の小説なので、伊賀七という人が主役になっているようです。その中に初めて伊能忠敬が登場するわけです。

ところがこの人は伊能忠敬を小説に登場させただけあって、修身的な忠敬像は描いていません。その言葉だけを引くとちょっと問題があるのですが、こういうふうに言っています。「酷薄非情、目的の達成のためには容赦なく物事を処理なさつたと人の噂に残るほどの先生であつた。」という言い方をしています。忠敬は娘のおいねさんという人を勘当しております。おいねさんといっしょになった養子の盛右衛門というのが経済的な失敗をしたということで、それを離縁する。ところがおいねさんはその盛右衛門についていこうとするので、忠敬さんはおいねさんを勘当する、というようなことをやっております。

それから次男の秀蔵という人がいますが、この人は素行が悪かつたというので追放してしまします。弟子たちの中にも破門された人が、平山郡蔵など何人もいます。そういうふうにいる切つてさつと切り捨ててしまう。だから酷薄非情だというわけです。これは少し言い過ぎではないかと思うのですが、しかし決して一色次郎は伊能忠敬を悪人のように書いていないのですが、ともかくそういうような形で取り上げてゐるわけです。

「四千万歩の男」から

七〇年代の終わりに初めて井上ひさしさんが『四千万歩の男』で、伊能忠敬を小説の主人公として取り上げました。このときちょうど私は三省堂で出した『伊能忠敬』という小さな本を原稿を書いているところで、井上さんが『週刊現代』に『四千万歩の男』を連載はじめたので、関心があつたのですぐ読みました。

ところが見たとたんに、つまらない間違いをする人だと思ひました。それはどういう間違いかというと、これは不思議なことですが、有名な偉い人がごく簡単な間違いをしてしまふんですね。佐原の伊能家のことを、「上総第一の名家」と書きました。これは上総ではなくて下総です。後で話しますが、松本清張さんは「房州佐原」と書いています（笑）。

人の悪口を言うわけではなくて、よく気をつけないと実は私自身も間違えているんです。何を間違えたかというと、三省堂で『伊能忠敬』を書いたときに、幸田露伴の文章を引用しました。原稿を書いているときは『幸田露伴全集』を側において見ながら書いていたのですが、徳富蘇峰と書いてしまったんです。そういうとんでもない間違いをやるものなんですね。

しかも、言われるまで気がつかなくて、数年たってから気がつきました。どこで気がついたかというと、井上ひさしの『四千万歩の男』が講談社から単行本になって出ました。そのときに、私の作った伊能忠敬の年表を使わせてもらいたいというので、「結構です」ということで向こうで使ったわけです。そのお礼として『四千万歩の男』の下二冊を送ってきました。それに「歴史小説ハンドブック」という薄い冊子がついていて、尾崎秀樹さんが書いています。伊能忠敬の研究史などについても簡単に書いてあって、その中に私のことが書いてあ

るんです。小島のこの本は啓蒙的な本で、私も啓蒙を受けるところが多かったです、とそこまではよかったんですが、「だが、どうも徳富蘇峰と書いてあるのはおかしいのではないか」ということで(笑)、ドキッとしました。あわてて自分の本を見たら「あっ、こんなことが書いてある」と、このときはびっくりしました。早速尾崎秀樹さんに、「こんでもない間違いをしました。改版のときには直します。」という手紙を出しました。

でも尾崎秀樹さんが気がついてくれたからよかったのですが、気がついてくれなければもっともとその間違いが続いていたのではないかと思います。小説家であろうが、歴史学者であろうが、政治家であろうが、自分が気がつかないところでもない間違いをやるということはよくあることなので、それ以後はなるべく物事は慎重にやろうと思っています。私は元来人間が慎重ではないのでよく間違えるようです。話を元に戻しますが、上総と書いてあるのでつまらない間違いをするなと思っただけでも、いつまでもこのまま活字になっているのは困ると思って、井上ひさしさんに上総というのは直したほうがいいという葉書を書きました。それまで全然面識がなかったのですが、すぐに返事がきました。このときの返事は本当はあまり男らしい返事ではなかったんです(笑)。これは誤植だというわけです。上と下の誤植などというのはあまり聞いたことがないのですが、それはそれでいいことにしておきました。

ところが続けて読んでいくと、またおかしいところが出てきました。それは伊能忠敬の息子の景敬という人について、「愚に近い」と書いてあるのです。要するに愚者だということです。文章を引くと、「正直って、この子は愚に近いが、自分の留守中に身代をつぶしてしまったりはせぬか……」というふうに忠敬が心配したと書いてあるのです。

私の調べたところでは、伊能景敬という人はもちろん忠敬ほどの人物ではありませんが、愚に近いなどという人物でもない。なぜならば、伊能家の資料の中に『旌門金鏡類録』という四部にわたる大きな記録があります。この編集を主として行ったのが伊能景敬であろうということは中を読んでみれば気がつきます。一人称で書いてある部分は全部景敬のことですから。それから伊能忠敬の知らないことがたくさん入っています。そういうことから、この『金鏡類録』というのは伊能景敬が編集したものであろうと私はおもっています。

その『金鏡類録』を見ていくと、終わりのほうに、佐原で殿様の税の取り方が悪いというので百姓一揆が起こりかけたことがあるのですが、それを彼が非常に手腕を発揮して一人も処罰者を出さないでおさめているわけです。だから愚に近い者などということはないんです。ただし、忠敬は息子をあまり気に入ってはいなかったようです。手紙でも批判しています。息子の三郎衛門は名聞(なもん)を好むようなところがあって、私に似ていないと言っています。あまり好きではないんですね。そういうことはあるけれども、だからといって景敬が能力のない愚に近い者であったなどということはどういえないと思います。

そこで私はそのことを、われわれのやっている香取歴史教育者協議会という会の「香取通信」というガリ版刷りの機関紙に書いて、それを井上ひさしさんに送ってやったのですが、またすぐに返事が来ました。それまで私は井上ひさしという人は書くものから見てもあまり几帳面な男ではないように思っていたのですが、出したらすぐに返事が来るんです。それも原稿用紙に一字一字ちゃんと字を入れて書いてくるんです。あれは丹念な人ですね。(つづく)

(こじま かずひと・佐原市史編纂委員長)

第一回歩測実験について

岩田 重男

一、はじめに

歩測は古代から現代まで行われている最も重要な長さの計量方法の一つである。人類は約五百万年前に直立二足歩行をはじめてから、生活のため常に地球の表面を歩いてきた。特に我々の属するモンゴロイドは古代世界における最大の旅行者で、二十万年前から一万年前までに東アフリカからユーラシア大陸を横断して北アメリカに渡り、南アメリカの南端まで達している。

中国の法顯（三九九—四一二旅行）・宗雲（五一八—五二二旅行）・玄奘（六二九—六四五旅行）は西域からインドへ求法の旅を行ったが、行程の大部分は歩測により測っていた。

このたび伊能忠敬研究会により行われた第一回歩測実験は、その規模も条件も満足すべき状態ではないが、わが国で行われた最初の組織的な歩測実験として、記録すべきものと考えられる。

二、歩測の発生と展開

古代中国において後世の尺に相当する単位が発生したのは、少なくとも七千年以上前である。この単位は日本列島を含む東アジア全体で使用され、その平均値は一七・三糎である。これは母系制社会において女性の手の大きさを基準としたものと思われる。後世の歩に相当する単位は少なくとも六千年以上前に発生し、当時の平均値は八尺に当たる一・三八四米であった。歩という文字は上半分と下半分がそれぞれ左右の足跡の象形文字から作られているように、左右の足をそれぞれ一回ふみ出した時の合計の長さに相当する。この単位は建物などが

大型化するにつれて、尺では短くて不便なので、尺について作り出された歩行を基にした単位であろう。古代ローマでもパッススという、歩幅を意味する単位があり、一パッススの平均値は一・四七八五米であった。英語のマイルという単位は一千パッスス（ミール・パッスス）、いわゆる一ローマ・マイルから導かれたもので、当時は一・四七八五軒（現在一・六〇九軒）であった。

日本では室町時代末期から、片足を出すたびに歩数を数える習慣が普及し、これが単位の歩と混用されてきた。したがって混乱をさけるため、古来から使われてきた複歩に当たる歩を使用し、単歩とは区別することにした。換算するには複歩を二分の一にすればよい。

人体の各部分の静的な長さから発生した尺などの単位と異なり、脚の運動によって生ずる歩幅を基準とした動的な長さの単位である。同じ角度に脚をひろげれば、高い身長の人ほど歩幅は大きくなる。しかし個人の歩きぐせによって、必ずしもこの通りにはならない。

また平坦な道を歩く場合でも、道が直線の場合と道幅に大小の変化があり、曲がりくねった場合では多少影響が出てくるであろう。海外でとられたデータによれば、角度により歩幅は減少し、三〇度の上り坂では歩幅は平坦な時の五〇％に減少し、三〇度の下り坂では平坦なときの六七％となる。荷物を持った場合、荷物の質量が大きければ大きいほど、歩幅は減少する。歩測に影響する他の条件に気象がある。雨や雪、それに付随して生ずるぬかった道、積雪によっても異なる。風向、風速も同様である。これらの諸条件を考慮した詳細な研究は未だ行われていない。

平坦な直線道路で一定の長さを歩く歩数を数えても、右の各条件の影響によって一定の長さを歩く歩数は増加する。これに右の単位長さを掛けることによって、距離は多く出る傾向があるので、特に注意が

必要である。

三、歩測実験の解析

実験に参加した人は男性一八人、女性十人、性別不明一人、合計二十九人であった。年齢は十代から七十代までで、二十代はいなかった。五十代が最も多く、全体の四一%を占めている。各年代の平均年齢を五歳とし、例えば十代は十五歳、五十代は五十五歳とした。これらの年代を X_i とし、一步の長さを Y 米とすれば、回帰方程式はつぎのようになる。

$$Y = -0.000583X_i + 1.4547$$

これから各年代の一步の長さの平均値はつぎの表一のようになる。

表1 年齢と歩の平均値

年 齢	歩 (米)
1 5	1.446
2 5	1.440
3 5	1.434
4 5	1.428
5 5	1.423
6 5	1.417
7 5	1.411

計算値は五十代で一・四二三米であるが、人により一・二五四米から一・六六七米まで分布している。長さは年齢と共に小さくなる傾向がある。これに使用した試料数は二十七であった。

身長(糎)を X_2 とし、一步の長さ(米)を Y とすれば、回帰方程式はつぎのようになる。

$$Y = 0.00242X_2 + 1.0439$$

これから身長と一步の長さの平均値はつぎの表二のようになる。身長が大きくなるにつれて、一步の長さが増加しているが、この場合も個人差は大きい。

表2 身長と歩の平均値

身長(糎)	歩 (米)
150	1.406
155	1.419
160	1.431
165	1.443
170	1.455
175	1.467
180	1.479

対して、試料数二六の平均値と標準偏差は八一〇±七五・八米で、中央値は三二米だけ大きくなっている。その割合は三・九八%である。これは歩測の発生と展開の章の末尾で指摘した結果が表れたのではないかと思われる。

C—Dの距離の九二二米に対して、試料数二五の平均値と標準偏差は九五四±二二・四米で、中央値は四一米だけ大きくなっている。その割合は四・六一%で、A—Bの三・九八%より大きくなっている。また標準偏差と平均値の割合はA—Bの九・四%に対して、C—Dは一二・八%と大きくなっている。これは後者の方が道路の条件が悪くなっているのと、疲労の蓄積の結果もあると推定される。A—Bの七七九米に対して個々の計算値は最小六二二米(差二十%)、最大九六七米(差二十四%)、C—Dの九二二米に対して最小六六七米(差二十七%)、最大一一六六米(差二十八%)に分布している。

つぎに最も基準値に近い上位五位までの成績を比較した結果を表三に示した。この結果、一般にA—Bに良い成績を示している人は、C—Dも良い人が多い。

本歩測実験を行う前に五十米の直線道路を何歩で歩けるかを四—六回くり返し練習した。a氏とb氏はその際の標準偏差と平均値の比が

つぎに富岡八幡宮参道入口(A)から伊能忠敬の隠宅跡(B)までと、法乗院(C)から間宮林蔵の墓(D)まで歩いた歩数から計算した距離と、渡辺一郎氏が三千分の一の地図上から計算した距離を比較した。

A—B点の距離の七七九米に

一％以内であり、計量に関するすぐれた資質と能力の持ち主であることが数字の上から感じられた。しかし他の四人の人たちもその差は紙一重であり、その順位は容易に入れ替わる可能性が高い。

表3 個人の成績と順位

順位	A-B (779米)				C-D (912米)			
	計量値 (米)	差 (米)	差 (%)	個人	計量値 (米)	差 (米)	差 (%)	個人
1	777	-2	-0.26	a	917	+5	+0.55	a
2	786	+7	+0.90	b	924	+12	+1.32	b
3	789	+10	+1.28	c	924	+12	+1.32	d
4	792	+13	+1.67	e	930	+18	+1.97	c
5	766	-13	-1.67	f	930	+18	+1.97	e

四、おわりに

伊能忠敬研究会により行われた第一回歩測実験は、日本の計量史上あらたな一頁を加える壮舉になった。今後ますます充実した実験がくり返されることを望むと共に、伊能忠敬の努力の一部を覗いた気持ち

(いわた しげお・日本計量史学会副会長・工博)

第一回例会 歩測演習の結果発表

編集部

九六年六月の第一回例会における、富岡八幡宮から間宮林蔵墓まで、約一・六キロの歩測演習の際の、実験データの解析を日本計量史学会の岩田副会長にお願いしてお願いしましたが、別項のようなリポートをいただきましたので御紹介しました。

もっとも精度の高い歩測をされたのは、浅井京子さんと、測定誤差は、わずかに〇・五％でした。賞品として「江戸料理辞典(定価七八〇〇円)」を発送しました。

その他に、首藤(b)、広兼(c)、神戸(d)、永野(e)、伏見(f)の各氏はいずれも誤差一％台の好成績をマークしました。忠敬と歩測は密接な関係にあります。これからも折をみておこないたいと考えております。よろしく願います。

理事会で協議の結果、入賞の各氏に左の称号を贈ることとしました。

- 「歩測名人」 浅井 京子 氏(美術館学芸員)
- 「歩測達人」 首藤 郁夫 氏(日本科学史学会支部長)
- 同 広兼 信介 氏(土地家屋調査士)
- 同 神戸 信和 氏(大学講師)
- 同 永野 達代 氏(鳥瞰図作家)
- 同 伏見 宜好 氏(歯科医)

賞品は柏書房の御好意によるものです。誌上を借りて御礼を申し上げます。(ローマ字は報告書中の略号)

お知らせ

編集部

一、佐原例会について

十一月十日、佐原地区の会員の方々のご尽力により、忠敬さんゆかりの地佐原で例会を開催しました。希望者の市内観光、地図展示、講演、懇親会という構成でしたが、市長はじめ地元の約一七〇名が出席して盛会でした。佐原の皆さんありがとうございました。

二、平成九年度会費納入のお願い

本会は発足以来約一年を経過しましたが、会員数一二〇名となりました。会員増加にご協力をお願いします。早速で恐れいますが、振替用紙を同封いたしました。一九九七年の会費のお振り込みをお願いします。

三、平成九年度例会の予定

春季例会 六月一日頃 東京
学習院大学で学習院中図全部の展示、説明と講演会、懇親会の予定です。
秋季例会 十月末予定 場所未定
また、「忠敬ツアー」という楽しいエクスカージョンも計画中です。

佐原例会の新聞記事

日刊建設新聞

平成8年(1996年)11月16日(土曜日)



展示地図の説明をする係員

佐原市が生んだ近代的測量法の先駆者伊能忠敬の地図の展示と講演会が十日、地元佐原市中央公民館で開催された。主催は伊能忠敬研究会(渡辺一郎事務局長、東京都新宿区下町二二二八)、ほか佐原青年会議所、佐原ライオンズクラブ、成田山弘教図書館が後援した。

会場には伊能忠敬蔵の地図資料、成田山弘教図書館蔵の伊能忠敬の地形写真、学習院蔵の伊能忠敬など約三〇点が展示、訪れた人たちに会員の説明があり、熱心に見入っていた。

講演会は鈴木全一(佐原市長)も出席し、関東近県のほか九州など全国各地から一六〇余人が参加した。講演に先立ち渡辺事務局長が「私たちは伊能忠敬の日本地図の調査を進めてきたが、昨年、フランスにあった伊能忠敬の里帰り展を企画し、佐原市の主催で開催したことから、伊能図を取りまわし、忠敬の業績を研究する人、地図を鑑賞する人などさまざまな分野から新しい忠敬像の発見を目指す交流の場とした」とあいさつした。

続いて鈴木市長が「佐原市を地図のまちとしてこれまで忠敬の業績の顕彰に努めてきた。新しい伊能忠敬記念館を現在建設中だ。

地図の展示と講演会開く

伊能忠敬研究会

鈴木「メディア活用し発信」



忠敬像の新しい発見をあいさつする渡辺代表



佐原市を発信地にとのべる鈴木佐原市長

忠敬と茶山

武田 威

会報九号『伊能忠敬Q & A』欄に菅茶山かんささんとの交流の記載がある。茶山は江戸末期の儒者・漢詩人でその学識風格と詩名を慕い多くの学者文人が交際を求め、また志ある子弟は争って門下に学んだ当時一級の教養人であった。

たまたま尊敬する菅好雄氏すがこうゆう（広島大学名誉教授）が茶山直系になる方なので、日頃ごぶさたの挨拶を兼ね記事のコピーを送ったところ折返し返書を頂いた。その要旨を御紹介します。

茶山関係の資料は全部福山市城跡公園にある県立歴史博物館に寄贈してある。その中の日記を主な資料とした索引によると茶山と忠敬は神辺で二回、江戸で二回会っている。最初は会報記載の山陽道測量の途中文化六年（一八〇九年）十一月二十七日、この時忠敬は久保木清淵の著書⁽⁴⁾「補訂鄭註孝経」を贈っている。二度目は文化九年（一八一二年）一月十二日神辺本陣で、茶山は「銅版万国図」⁽⁴⁾を贈っている。江戸での出会いは文化十一年（一八一四）九月十四日と十二月一日で、婦郷の迫った茶山への挨拶に忠敬が阿部藩邸に向いたようである。この後同年五月一九日神辺着の忠敬書簡と文政元年（一八一八年）九月二十三日忠敬の死去を知った記事（日記）がある。忠敬の死を秘していたようである。

この他文化八年（一八一一年）閏二月十一日神辺に宿泊しているがこの時は直接会っていないようだ。

- (1) 富士川英郎「菅茶山」(一九九〇 福武書店)
- (2) 広島県深安郡神辺町(福山市の北方)
- (3) 神辺の公式宿泊施設、一、二回共菅沼武十郎宅に宿泊(佐久間達夫「新説伊能忠敬」)
- (4) 博物館寄贈図書の中にある由
- (5) 福山藩主、安政年間斬新的な幕政改革を行った阿部正弘が出た。
- (6) 忠敬の死は文政元年(一八一八年)四月であったが、地図未成の為喪の公表は同四年九月であった。
- (7) 神辺町 園右衛門宅に宿泊(「新説伊能忠敬」)

以上であるが、この頃になると忠敬の業績名声は全国的になっていて宿泊の手筈も事前に整えられていたのだろう。或は筆マメで行きとどいた忠敬のこと故予め茶山宛書簡を送っていたのかもしれない。訪ねる人の多い誇高き茶山が自らおもむいたのも世にきこえたこの人物に格別の興味をもったからであろう。片や学問と詩文の世界、一方は厳しい作業の監督指導と、所が変り相手の異なる折衝に明け暮れる忠敬である。初対面のあいさつの後は来客のもたらした諸国話や、江戸出府の折の道中体験は忠敬との恰好の話題であったろう。忠敬得意の天文、地理地動説等についても話は交はされたにちがいない。されば二回目の神辺宿泊の時茶山は蔵書から「銅版万国図」を贈っているのである。一道に徹した達人同志の交感が蔵書を交換し談夜に至ったのであろうが、この一句に巡らす想像も楽しい。

菅さんの二信によれば、菅、菅沼両家は家も近く、武十郎は茶山と大層親しかったそうであるが、園右衛門については不明という。なお、菅さんの専門は英文学である。

(たけだ たけし・元東芝勤務)

駆け足の佐原散歩

浅井 京子

十一月十日、佐原での第二回研究会に先だち、駆け足の佐原散歩が企画された。佐原駅には忠敬さんの歩巾の足跡が刻まれている。伊能洋氏に「まず歩巾を確かめて」といわれ、足跡に自分の足を乗せてみる。バランスを崩しかけ、さすが男性の歩巾だと妙に納得し第一歩を踏み出す。

諏訪神社の忠敬像を車の中から仰ぎみて、忠敬旧宅と記念館へ。このあたりは由緒ある商家が点在する。古い屋並み再現の建築をする場合には補助金が支給され、整美が進められている。さらに、旧宅前の樋橋落水が復活され、記念館の開館日には落水する水音が楽しめる。

まず井上靖子・伊能洋氏の解説で旧宅を見学する。最適の解説者を得てリアルな体験。昭和三六年開館の記念館はかなり古色を帯びていた。約千点の資料はみごとだが、現状では、一般の人々を「忠敬の世界」に引き込むのは厳しいのではないだろうか。数年前には現在建築中の建物に移るとともに展示も一新されるとのことである。特に若い人達に忠敬さんの仕事を実感でき、新鮮な刺激を発する元氣な記念館になることを祈念している。

次に伊能家の墓所がある観福寺へ行く。関東三大厄除大師の一つとして知られる大寺で、紅葉を愛でながら墓参をする。さらに香取神宮へ。「正月には家から歩いて参詣に来たものです」との伊能氏の言葉を聞きながら社殿にむかう。昼食は格子窓の印象的な小堀家(明治三三年・県文化財)で、柚子の香いっぱいの柚子蕎麦、大麥結構でした。午後から中央公民館で、見学と、小島一仁氏・渡辺一郎氏の熱き講演を聴講、私の忠敬像を紡ぐ一日でした。

(あさい きょうこ・富岡美術館学芸員)

忠敬を題材とすることのむずかしさ

植田 浩一

佐原例会で「伊能忠敬との出会い」と題する小島一仁先生の講演があった。小島先生が調べたところによると、伊能忠敬をとりあげた作品は極めて少なく、それは作家が忠敬は実直で真面目すぎて人間として面白くない、という見方しかしなかったかららしい。

波乱万丈の人生というのは、作家にとってまとめ易いのであろうが、忠敬の場合は変転の人生という面白さではなく、成し遂げた仕事の世に抜きん出たという「面白さ」になろう。それを普通人にわかるように説くには、相当の根気と体力、なかならず当時の近代科学に對する目配りも必要になる。今まで作家が忠敬をとりあげることの少なかったのは、作家の力量の問題ではないだろうか。

忠敬の業績はプロデューサーとしての成功と実証科学への情熱と実践という面から評価されるだろう。人間として面白味に欠けるという見方もあるが、社会を支えてきたのはこういう真面目な人たちの力によってであり、そのお陰で人智も進歩してきたという見方もできる。今日の先端技術の研究者には、こういう型の人が多いのではないだろうか。この人たちの研究の過程には、発見・挫折・急転などのドラマ的な物語があるだろうが、それを一般人にも分かるように面白く解説するのはむずかしいことだろうと思う。忠敬を当時の先端技術の実践者として考えれば、その業績の解明を中心とする作品をまとめることはかなり困難なワークとなるだろう。

それにしても、小島先生の話のうまさには引付けられた。「忠敬」にとりくむことになった出会いのことなど、率直に軽妙な語りで、時に勘所を押さえた批判を交え、長時間も飽きなかった。「面白くない人間」忠敬について「面白く」語ってくれる方である。

(うえだ こういち・元朝日新聞勤務)

伊能図と官板實測日本地圖

清水 靖夫

官板實測日本地圖四鋪は、江戸期に国内で版行された唯一の、伊能関係図である。

本稿は、官板實測日本地圖（以下官板実測図と略称）の「北蝦夷」「蝦夷諸島」の二鋪を除く本州・四国・九州の部分について、若干の私見を記すものである。

幕命を受けて伊能忠敬等によって作成された諸図（以下伊能図と略称）は、幕府上呈本のほか、必要に応じて手写されている。原本は二度の災禍で失われたが、近年、諸研究者の調査によって、諸写図が各地に存在することが判明してきた。しかし、「大図」の大部分は未だ知られず、「小図」については、神戸市立博物館所蔵（旧南波松太郎蔵）の北海道部分と西日本部分の二鋪、阿部正道氏蔵の北海道一鋪を除いては、国内での存在は知られていない。シーボルトは、帰国後一八四〇年日本地圖を作製したが、限られた情報の中で、伊能図以前の諸情報（諸地物）を、彼の作った地圖に盛り込んでしまっている。また、一八六一（文久元）年日本近海の測量を強行しようとしていたイギリス海軍のアクティオン号に、攘夷を恐れた幕府（軍艦方）は伊能小図を与えている。その結果、英国海図二三四七号の日本の形は著しく良くなっている。この、英国に残されていた伊能小図によって、諸図との比較が容易となった。

官板実測図は、前に記したように幕末に刊行された唯一の伊能図に関する地図である。幕府系の諸図は、代々世襲の宮田六左衛門（通称

天神山 京橋区南伝馬町に居住 昭和三〇年頃当（二二）代主人に秋岡博士と共に面談）に彫刻させていた。「官板実測図」も第九代の宮田六左衛門に拠るものであったという。

「官板実測図」についての、記述は多くない。伊能図からの編纂図として、明治以来の古地図研究者には、軽んじてこられた。秋岡博士は、伊能図の關係図として、名称と表紙の色による分類程度に止めてあり（英図 1855, 1871）、保柳博士は、江戸時代における伊能図の利用（宛書 1871）の中で「慶応年間に開成所から伊能小図を基とした官板実測日本地圖（木板刷、明治三年に大学南校から修正再版）が刊行された。しかしこれは粗末なものであったし、近海の航行用以外には、どの程度に利用されたものか明かでない。」として、官板実測図については、記述の対象にはなっていない。

明治期あるいはその直前に刊行された地圖は、古地図とするには忍びなかったであろうし、また、生活をしていた時代でもあった。また、伊能図の地誌的な興味は、専ら大図（縮尺三六、〇〇〇分一）と中図（縮尺二一六、〇〇〇分一）に集中し、小縮尺編纂図である小図への関心は、上記二図に較べると小さかったと考えられる。その結果、失われた小図（実際には神戸市立博物館の南波博士旧蔵図があったが、中央部を欠いていた）と官板実測図との比較は、する術もなく、また行われた形跡はない。また、官板実測図は「伊能図とその他の資料」からの編纂が、常識的に通用することとなった。勿論、伊能忠敬らの測量に拠らない「北蝦夷」は村垣与三郎、「蝦夷諸島」は松浦武四郎他の資料に拠ったことが知られている（英図 1871）。一方、「畿内……」には伊豆七島・八丈島の南方に青ヶ島、小笠原諸島が加えられており、これは、幕府の他の資料に拠ったものであり、「山陰……」の先島諸島も、これは伊能忠敬らの測量範囲ではなかった。本州・四国・九州に

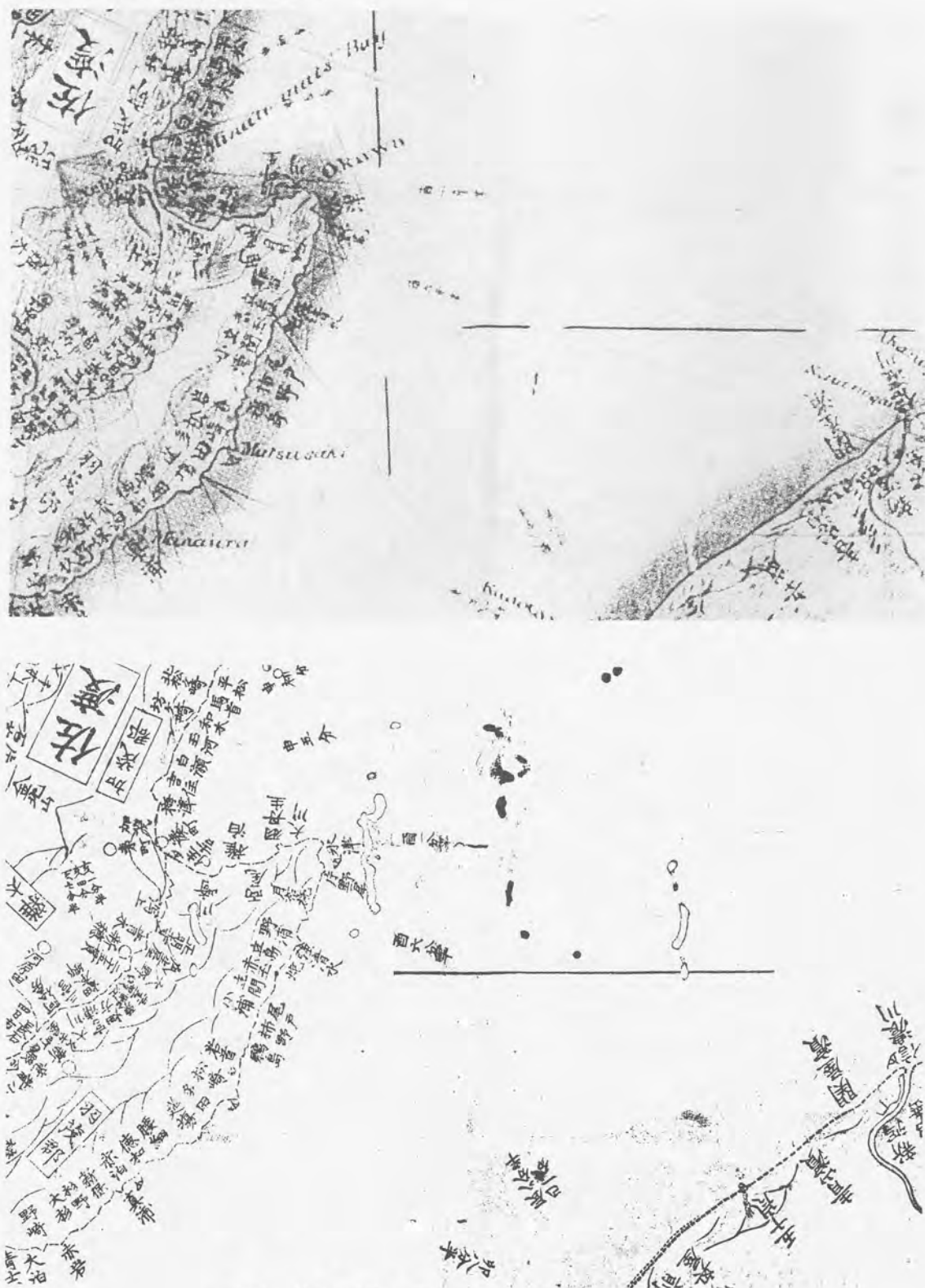


図1 佐渡島付近の官板實測日本地圖(上)と伊能小図

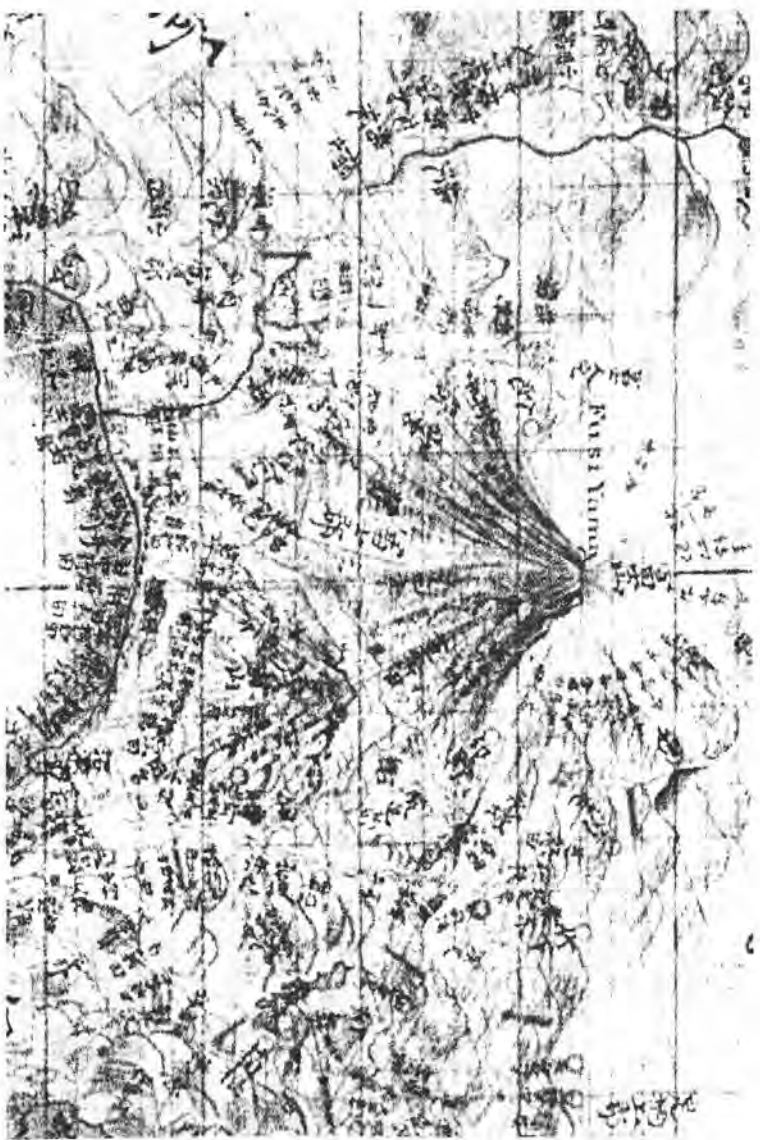


図 2 富士山付近の官板實測日本地圖山と伊能小図



図3 官板實測日本地圖中にある記号表

については、以下比較の通りである。

佐渡島付近を比較すると、官板実測図では、踏査線（実測線）と非踏査線の区別が、伊能小図と同じであること、山の形を灰色で表現しているの、色彩豊かな小図と較ぶべきもないが、山の形・位置は、小図と同じである。地名の書き込み位置も、まったく同じである。ただ、交合法類似の朱色の方位線はまったく省略され、方位線の集る山岳に、方位角のみが記入されている。小図中の国名・郡名・国界・郡界・城郭・陣屋・駅・港・神社・仏閣などの記号は、小図の朱色に対し、墨色になっているが、形と記入されている位置は、小図上と同じである。

富士山山頂付近でみると、前記佐渡島付近と地図の内容については全く同じであるのは変わらない。富士山を中心として小図に描かれている方位線は三三本、官板実測図上に描かれている方位の文字も同じ三三個である。現在まで小図上での方位線の数を数えることが出来ず、

比較できなかったが、文字の位置なども全く同じであり、山肌のひだの表現なども、ほぼ変わりはない。経緯線も、中図では描き方に若干の差異があるが、ここでは変わらない。なお、両図に国立博物館蔵中図にない方位がある。この図版外になるが、相模國津久井郡が両図とも「津久井縣」となっており、原図の誤りが、官板実測図にそのまま踏襲されている。

おわりに

官板実測図のうち、本州・四国・九州とその付近の島嶼については、小図をそのまま版刻したものである。比較に使用した英国水路部所蔵の小図と、既測図域で同じであるということは、官板実測図が伊能小図の写しであるということができよう。それと共に、幕末に彫刻された官板実測図に使用された失われた原図と英国図は、ほぼ同じ内容の地図であったと考えて差し支えなからう。地図の親子・兄弟を論じるのは、甚だ難しい。しかし、ここまでの異同であれば、百聞より一見を信じたい。

それにつけても、比較可能な写図が手元に存在するのは、有難いことである。なお、比較には伊能日本図探究会の複製図を使用した。

(しみず やすお・立教高校教諭・法政大学講師)

文献

- 秋岡武次郎 一九五五 『日本地図史』 河出書房
- 秋岡武次郎 一九七一 『日本地図作成史』 鹿島研究所出版会
- 保柳睦美 一九七四 『伊能忠敬の科学的業績』 古今書院
- 伊能日本図探究会 一九九五 『英国にあった伊能忠敬の日本全図』

伊能家文書紹介〔書簡〕三

坂部貞兵衛の書簡(三)

安藤 由紀子

何年か前に、『家の旅』という本を読んだことがある。將軍吉宗が「見たい」と言い、南京船の船頭鄭大威によって献上された象を、長崎から江戸まで七四日かけて歩かせてきた記録を再構成したものであった。近世社会を縦断して、「先触れ」を出しながら歩いてくる象は、付添い役人や世話係の村方を悩ませ、沿道の黒山の見物人を喜ばせ、文字通り各藩を揺るがせた。古き良き泰平の、江戸中期の話である。それから八〇年、外庄の高まりの中、伊能測量隊は、新しい風を追い風にして、つむじ風のように、各地の矛盾をあらわにしながら、日本列島を駆け抜けていった。

伊能隊に対する各藩の対応は、幕府の事業となった文化二年の第五次測量を境に、大きく変わった。後半の各藩の内部資料では、「巡見使並みの扱い」⁽¹⁾をすることになった。『書上げ』(村の石高、家数、東西・南北の長さ、街道、河川、寺社、名所旧跡などのリスト)の提出を要求された村方では「御領分改め」⁽²⁾と受け取っていた節がある。両者共、時代遅れの認識という外はない。彼等は何も知らされておらず、今緊急に日本国を測量し、その正確な地図が必要なのだということが理解できないのも、無理はなかった。

こうして測量隊は、領界紛争に巻き込まれることになる。普通領界まで来ると、次の領国の付廻り役人が出迎え、人足も含めてスムーズに引継ぎが行われる。しかし係争地域では、ふだんから仲の悪い二組みの二本差しの役人達に付廻られたら、なにが起こるかわからない。

五島藩(一五、五三〇石・長崎県)では、江戸時代初め二四代盛勝の時、叔父盛清が三千石で分知、捕鯨の盛んなこの地方では、領界はそのまま漁業権ともつながり、長年根深い対立が続いていた。忠敬宛の書簡の中で、高橋景保は「五嶋の江戸留守居役が訪ねてきての内談によれば、隣接する平戸・大村両藩並びに分家との間で領界論ある由、少々争いにもなっているようで、一同迷惑していることでしよう。」と述べているが⁽³⁾、事実は「少々」どころではなかった。

九六年夏、福江市にある五島観光歴史資料館の宮嶋氏から送っていただいた『太田家文書』によれば、次のようなトラブルがあった。

文化十年五月二日、分家富江領の年寄平田徳左衛門が本藩にやって来て、この度の測量方廻浦に付いて、大目付相手に色々面倒な申入れをし、一向に落着せず、本藩の家老坪内直記が領界を書上げた覚書を渡した所、それを突っ返して退出してしまった。覚書には、「測量方へ提出の『書上げ』を作るにあたって、分家において境目など押付けがましい要求が目立ち、福江御主君のお耳に達し、不埒なる事と思召され云々」とある。

翌三日、「平田徳左衛門事、存知寄之儀有之候付、役人共へ預置候条、其旨可相心得者也。」と、とうとう御預けの処分を受けてしまった。富江では大いに驚き、四人の重臣が駆け付けこの処分不承知の旨懇願、本藩は、よんどころない点もあるとして、これを許した⁽⁴⁾。

測量隊が到着すると、双方は競うようにして役人を挨拶に出し、接待した。『日記』によれば、五月二十二日、測量隊は風待ち五日の後、対馬の府中出帆、五島へ向かう途中、平戸の田介浦へ着いた。船中泊の彼等一行を、福江の家臣二人、富江の家臣一人が訪れた。三人は、月初めからずっと、予定変更を知らずに、壹岐の勝本浦で一行を待っていたのだという。翌日、宇久島の福江領平村に着いた夜、福江では、

付廻り役人、庄屋、宇久嶋代官、医師など十一人を挨拶に出頭させ、富江分家でも三人が御機嫌伺いに出ている。⁵⁾

史料 一

(世田谷伊能家文書)

B二五六 坂部貞兵衛書簡 忠敬宛 「文化十年六月十六日・若松島」

又書添。只今書状封し候所へ、永井氏より

申聞にて、先達て永井へ御頼被置候

福江より御贈りの員数、間違之由にて

一角増しニ相成、都合十二角ニ

御座候由、此段申上呉候様、永井より申聞候。

一、私儀も、先達て宇久嶋にては、朦中故

贈り物無之候所、此度本家、分家共

御贈り有之候。本家は十角、分家は

五角にて御座候。

一、分家、青方村止宿之節、右贈り物

有之候所、慶蔵・甚七へも、菓子代

として贈り有之候ニ付、夫は間違ひにて

可有之、先達て宇久嶋にて受納候ハ、

此度ハ相返し候方、可然と相返候処、

其後又々別段、私共、下役衆共

一同菓子代、被相贈候。其御方様

御様子相分り兼候ニ付、返しも不成

先、預り置申候。御同様ニも候ハ、

受納可仕哉。夫共相返し可申哉。

猶、福江にて、御相談可申上候得共、序故

此段申上候。以上

十六日

【(前略) 福江からの贈物の額について永井より報告あり、先日は間違ひで、一角増えて合計十二角になるそうです。このように申上げるよう永井に頼まりました。

一、私の方も、先達て宇久嶋では、喪中の故か、贈物はありませんでしたが、このたびは本家分家双方から贈物が届き、本家からは十角、分家からは五角でした。⁶⁾

一、分家は、私共が青方村へ泊まった時に届けてきて、慶蔵、甚七へも菓子代を渡されたので、これは間違ひにちがいない、先達て宇久嶋で受納したのならこの度は返すべき、と思い返納致しましたところ、その後また別に一同へ菓子代を届けてきました。貴方様の方のご様子が分かりませんので返しもならず、ひとまず預かっておきました。受納返納どちらにすべきでしょうか。(後略)】

また、本誌第八号に掲載すみのB一一四の書簡で坂部は、

【(前略) 明日久賀嶋の瀬戸からお始めになり、これまで通り山を右に、東南は海にしてお廻りになれば、田之浦へお泊りという事になるでしょうが、兼ねてお話のあった紛争地点はこの近くのように、ご苦労ですが、様子もわかり丁度宜しいと思われます。(後略)】と書いている。

測量隊はこの事態を、どのようにして切抜けたのだろうか。

文化十年六月十九日の『測量日記』によれば、『津婦羅島を測る。

この島は、福江領か富江領か係争中の島で、測量困難と思われたので、次のように申渡した。「ここは、当方のみで測量を行うので、両領より手伝人足、小船、諸器持人足を半分ずつ差出すこととし、両領とも付廻り役人と村役人は出頭に及ばない。ただ双方より、案内人一人ず

つ差出すこと。』という苦肉の策をとったのである。

江戸の景保から、なんらかの指示があった様子もなく、忠敬の老練な知恵が道をつけていったのだろう。

若松嶋は、五島領四分の三、平戸領四分の一で、入りこんでいた。

平戸藩の付廻役人は、遠路はるばるの長期出張になるので、心優しい坂部は、大変気を使っただろう。

史料 二

(世田谷伊能家文書)

B 二一五 坂部貞兵衛書簡 忠敬宛 「文化十年六月二〇日・日嶋」

去ル十八日之御報、即日相届、拜見仕候。愈御壮健

奉賀候。然は、其節被仰下候は、枇嶋も

風波にて、御測量も御出来兼候由、其後

如何御座候哉。最早、奈留嶋へ御移りも

被成候哉と、奉察候。私共儀も今

廿日若松村発足、日之嶋へ引移

候得共、若松嶋両日程之仕事相残り

日之嶋より掛ケ相測候積り、日之嶋、有福嶋、

獅生嶋、相嶋等両日之仕事御座候得共

無利ニ小手分いたし候得は、一日ニも相済

可申候得共、日之嶋、有福嶋之外通りハ

難所之由、如何可有御座哉。何レ

一日縮メ候ても、明廿一日より三日之仕事ハ

目ニ相見申候。右相済次第にて、奈留

久賀之内へ罷越可申と奉存候。其

御方様、枇嶋之御済方御都合ニテ

何レ共繰合セ可申候間、其以前、枇嶋相済、奈留へ御移りニも候ハ、御様子承知仕度奉存候。

当方も、明日より両日相廻り候ハ、残り之

日割も相知レ可申ニ付、其節は又々

御掛合可申上候得共、先、今廿日

日之嶋へ引移候段、申上度、如此

御座候。以上

六月廿日

貞兵衛

東河先生 前

尚々先日申上候、枇嶋仏堂崎之目当

帆、今日相見へ不申候。其外、幟等遠く候故、

不相知、私共廻り場所よりハ繫キ町見出来

兼申候。其御方ニテ、宣敷御繋キ可被下候。

一、奈留嶋へ、最早御移りニも候ハ、若松嶋之

瀬戸向キ合ひ之所へ、両三ヶ所、幟を建置

可申旨、御談可被下候。勿論此方附廻り役人へ申

談候得共、為念、此段申上候。

一、本書之通り、無利手分も、若松村逗留餘り永く

平戸領、四ヶ一之入込ニテ、彼方より出張も、久敷相成

氣之毒故、小嶋々々等、私足痛をこらへ、

三之助、清助不承々々をだまし々々々

漸々相廻り候次第、私も、最早難所之巖石

等飛渡りも出来兼、老込ミ候得共、無余義

小手分いたし、相廻り候義ニ御座候。

一、白紙野帳、油紙包一つ被遺、慥ニ落手、早速

門谷へ相渡申候義ニ御座候。猶追々、可願上候。

『一、本文に述べました通り、無理に小手分けをしましたのも、若松逗留があまり長くなりましては、平戸領四分の一の入込みで、平戸からの出張も久しくなり、気の毒と思うからで、小島々々、私も足痛を我慢し、不承不承の三之助、清助をだましだまし、ようやく廻りました。私ももう、難所の岩石を飛び渡ることもできなくなり、すっかり老込みましたが、しかたなく小手分けして、廻った次第です。』

この手紙をかいて四日後に彼は発病したのだった。

時あたかも函館では、ロシア海軍中将ゴロウニンが二年あまり幽閉されていた。伊能忠敬に近い人々、足立左内、馬場佐十郎、間宮林蔵などが、このロシア人と接触していた。高橋景保の手配によるものである。

この手紙の日付と同じ二十日、軍艦ディアナ号は、高田屋嘉兵衛を乗せ、彼の送還と引き替えにゴロウニンの釈放を求めて、国後島についている。幕府は、八月に釈放を決定した。⁽⁷⁾

八月十七日付の忠敬宛高橋景保書簡は、坂部の病状を憂い、もし死去のことがあっても、「御用向きもあと暫くになりましたから、お心を強く持ち、覚悟なされ、お勤めに励まれるように」と述べた後、「松前に囚われのロシア人も、当月中にはお返しになる都合となりました。足立左内、馬場佐十郎も、冬までには帰って来るでしょう。」と書いている。世の中は、大きく動きつつあった。⁽⁸⁾

それから五十年あまり後の明治元年、兵を率いて上洛した藩主五島盛徳は、攘夷強化のための措置として、富江領の合併を政府に要求した。富江の領民はこれに抗して、竹槍を持って戦う決意を示したという。長崎府官井上聞多が五島に渡りこれを説得、翌二年ついに合併が実現した。⁽⁹⁾

しかし廃藩置県は、このわずか二年後だった。島原・平戸・大村・福江(五島)の各藩は、長崎府に合して長崎県が生まれた。⁽¹⁰⁾

江戸時代を終わらせようとする力は、象どころかローラーのように、人々の命をかけたこだわりを押し潰していった。伊能測量隊は、そのローラーの「先触れ」であった。

〔注〕

(1) 將軍の代替りの時、幕府官僚を三人一組で全国へ派遣し、在地の民衆に接し、個別領主の「仕置の善悪」を判断させた。次第に受入れのマニュアルができて、形式化した。広島藩の測量隊に対する扱いについては、渡辺孝雄著『伊能忠敬の安芸国沿岸測量』入船山記念館館報第七号にくわしい。

(2) 千葉県史料『伊能忠敬書状』巻末の『糸魚川日記』や、他の庄屋文書によれば村方では、あらかじめ村境に梵天や杭を立てておくように要求された故か、境界を確定するためと誤解していたと思われる。

(3) 記念館文書・高橋景保書簡八四一—一〇

(4) 福江市五島観光歴史資料館蔵(コピー)・五島太田家文書

(5) 『測量日記』佐久間達夫編(文化十年五月〜七月) この記事全体にわたって参考にさせていた。だいた。

(6) この「角」は、一分金のことかと思われるが、不明。乞御教示。

(7) 『日本俘虜実記』ゴロウニン著・徳力真太郎訳

(8) 記念館文書・高橋景保書簡八四一—一九

(9) 藩史大事典と『海鳴りの五島史』郡家真一著

(10) 廃藩置県迄のわずかの間のみ、五島藩は福江藩を称した。(五島文化協会の野圭志氏のご指摘による。)

源空寺墓碑建立始末

伊能 陽子

忠敬の墓所については、本誌夏季号に解説されているように、伊能家代々の菩提寺である佐原市の観福寺と、忠敬自身の望みで、師・高橋至時の隣に眠っている浅草の源空寺とがあるが、史料の中から源空寺の石碑に関する文書を見つけ、墓碑一式の代金が、拾七兩近くかかったとか、石碑正面の大きな文字が、一字につき四匁で、三面にびっしり刻まれている九百六拾壹文字は五分宛と知ると、慣例になっている春秋の彼岸参りが、また一味違ってくる。

忠敬が亡くなったのは文政元年四月十三日だが、源空寺の石碑が建てられたのは、文政六年である。亡くなった年の六月付けで、源空寺の永代供養料受け取りがあるから、彼の希望通り、高橋先生の隣に眠ることができたのは確かな事だが、地図の完成まで、公には喪を伏せることになり没後も忠敬は存在していたことになる。

公然の秘というか、このような例は珍しい事ではなかったのだろうが、それでも「伊能勘解由 巳歳七拾七」の文字は不思議な感じがする。現在、手元にある一連の書き付けは次の通りだが、その中からいくつかり上げてみる。

源空寺墓碑建立まで

※は掲載文書

文政元年四月十三日死去

元年六月

源空寺永代月牌

D五九

四年八月

法乗院永代月牌

D五二

※四年八月

寺送り一札 法乗院→源空寺

D五一

※四年八月

心願書付写

A 八九一

四年九月

心願書付下書

A 八九二

※四年九月四日

病死届

A 一四七

※四年九月四日

忌服届

A 一四七

※六年正月

石碑建立明細

D 五四

※六年四月十四日

石碑代金覚

A 一四九

史料 一

D五一

(世田谷伊能家文書)

送一札之事

一、八町堀、伊能勘解由儀、拙寺檀家ニ御座候処、此度は別段願ニ付、貴寺へ葬式相送り候間、御寺法之通、御取置可被成候。為念、寺送り一札、依て如件

深川寺町

真言宗 法乗院

文政四巳年八月

浅草 源空寺様

忠敬は、江戸では深川法乗院の檀家であったから、本来なら真言宗の法乗院で出すべき葬式を、浄土宗の源空寺にまかせる許可書なのだろう。忠敬の孫、忠誨の日記によると、毎月命日には源空寺墓参を欠かさなかったようだ。文政三年三月十三日には、「晴天。祖父三年忌也。」とある。また文政四年三月十五日には、「青木勝次郎来ル。祖父の画像ヲ持参。」とあり、二十日には画像の表具を頼んでいる。続いて二七日、忠誨元服。そして、「大日本沿海実測全図」完成、江戸城の大広間にて上呈の模様をこう記している。「七月十日 曇天 五時 過 下河辺、永井、門谷、吉川、予、大手ヨリ御申之ユエ行ク。高橋

先生ヲマツ。先生来り程ナク大広間エ、京ヨリ西之方大図一四卷開キツグ。中図、小図又ツグ。御老中、若年寄御ラン被遊、又諸卷卷キ納メ、御目付衆へ伝言シテ諸箱ヲ置キ帰ル。八半時過帰宅。」

(記念館所蔵「忠誨日記」佐久間達夫氏釈文による)
さて、ここで忠敬の再登場である。

史料 二

A八九一

(世田谷伊能家文書)

兼々奉申上置候心願之趣申上候書付

私儀、文化元子年九月、新規被 召出、御宛行拾人扶持

被下置、小普請被 仰付、佐藤修理組ニ罷成、天文方

高橋作左衛門手付出役被 仰付、国々測量地図

御用、是迄、無滞相勤罷在候處、当春以来、痰咳差発

相勝不申候間、青山下野守殿医師足立長雋、松平

陸奥守医師桑原隆朝、療治請、薬用仕居候處、胸痛

強次第二相勞、快氣可仕牀、無御座候。若、相果候ハ、

跡式之儀は、兼て申上置候通、相続之者も無御座候間、

左之通被成下候様、奉願候

一、私御宛行、御扶持方拾人扶持、孫、伊能三郎右衛門へ被下置

且又、私並伴三郎右衛門へ、御免被成下候帶刀之儀

可相成御儀ニ御座候ハ、伊能三郎右衛門家へ、代々

御免被成下候様仕度奉存候

一、於御当地、相応之町屋敷一ヶ所、被下置候様仕度奉存候。

右二ヶ条内、可相成儀ニ御座候ハ、何卒願之通被成下

候様、偏ニ奉願候。以上

文政四巳年八月

伊能勘解由 印

渋江新之助殿

『以前から申し上げておりましたお願いの趣意書

私は、文化元子年九月、はじめて召し出され御あてがい拾人扶持を

頂き、小普請を仰せ付けられ佐藤修理組になり、天文方高橋作左衛門

手付け出役を仰せ付けられ、国々の測量地図御用を、これまで滞りな

く勤めて参りましたが、この春以来、痰咳がでて体調がすぐれません。

青山下野守殿の医師足立長雋、松平陸奥守医師桑原隆朝に治療を受

け薬を用いておりましたが、胸の痛みが次第に強く回復の見込みがご

ざいけません。もし私が亡くなりましたら、跡目のことは以前から申し

上げてありますように、相続する息子がおりませんので、左の通りに

して頂きたいとお願い申し上げます。

一、私の御あてがい拾人扶持を、孫の伊能三郎右衛門へお与えくださ

い。また、私並びに伴、三郎右衛門へ代々お許し頂いている帯刀

を、でき得ることならば、伊能三郎右衛門家へ代々お許しくださ

るように、お願い申し上げます。

一、江戸に、応分の町屋敷一か所を下さいますように、お願い申し上

げます。

右二ヶ条の内、出来ることならばどうぞ願いの通りして頂けますよう

に、よろしくお願い申し上げます。

文政四巳年八月

伊能勘解由 印

渋江新之助殿

文化十年、長男景敬が四七才の若さで病死している。忠敬は第二次九州測量中であつた。孫の忠誨はこの時七才、伊能家の後々のことが、どんなに気にかかつていたであろう。このような書類は高橋景保の指図によって作られたようである。

そして、文政四年に改めて忠敬は亡くなることになる。(以下次号)

測量隊の落とし物

伊藤 栄子

文化五年（二八〇八）三月、第六次測量の

ため伊能隊の一行は、淡路島から四国の現在の鳴戸市へ上陸、徳島から高知、足摺岬、八幡浜と四国の海岸線を廻って、松山城下を通り、九月七日川之江村へ入って来た。川之江村では笹ヶ嶺登山の行程もあって、この頃になると隊員の中にも疲労が見られる。季節の変わり目を経ての仕事は、体調をくずすこともあったであろう。川之江村に入る前に宿泊していた小松でも、藩の会所日誌を見ると、「伊能様、秀蔵様（忠敬二男稻生秀蔵のこと）御不快之由、又下役之衆にも不快有之」という文書が出てくる。

さて、左の文書は川之江市立図書館蔵、大庄屋所の「役用記」に載っている、珍しい測量隊の落とし物の一件である。

「解説文」

（一）

一筆致啓上候、冷氣御座候處、弥御堅勝被成御座、珍重奉存候、誠ニ天文方様其御表御機嫌克被成御立、嘸、御安氣可被成与奉察候、然ハ天文御道具之内、真鍮^{シヤウ}ニテ丸き物御本陣

へ御取落し置被成候由、右御役方様より、取遣し候様被仰聞候ニ付、役人差立申候間、此者へ御越可被下候、右可得其意如此ニ御座候已上

九月九日当賀

山下右平次

三好四郎兵衛

（一）の大意

冷えて参りましたが、御元気で何よりです。天文方様御機嫌よく御立ちになり、御安心の事と存じます。実は、天文方御道具の内の、真鍮で丸い物を、御本陣へ落とされたそうです。御役人様がそれを取りに、御越しなさるとの仰せですので、よろしくお願いします。

（二）

貴札致拝見候、如仰冷氣御座候處、弥御堅勝ニ可被成御座、珍重奉存候、然ハ今日ハ其御地へ測量御役人様方、御機嫌克御入込被成候ハ、御同慶奉存候、且、天文御道具之内真鍮丸き物、御本陣へ御取残し置被成候趣ニテ、御役方様より取ニ被遣候様、被仰聞候ニ付、御村役人被遣候所、御本陣ニテ天文場所幕薄縁筵共、得与相改候得共、相見へ不申候、勿

論何ニても御取落御座候得ハ、早速持せ上可申候處、恐々吟味仕候得共、相見へ不申候、猶再念致候而、明日可得貴意候間、御役人様へ、此段被仰上被下度奉願候、右御報迄早々、如此御座候、恐惶謹言

九月九日

猪川平七

三好四郎兵衛 様

山下右平治 様

（二）の大意

ところで今日は、御役人様方が、御機嫌よく測量の地へ御入りなされ、御よろこび申上げます。さて、真鍮の丸い物について、本陣の幕や、うすべり、むしろ等のあたりを調べても、見当りませんでした。尚、再び探してみますので、御役人様へ御伝えください。

（三）

以飛札得貴意候、各様弥御堅勝被成御座、珍重奉存候、然ハ昨日被仰聞候品、今朝已来、右天文場所柱跡掘穿相改候處、慥御座候ニ付、早速村役人ヲ以持上申候、乍御面倒、御差出可被下候、尚、万事宜御取計奉願候、右早々如此御座候、以上

九月十日

猪川平七

三好四郎兵衛 様

山下右平治 様

(三) の大意

急ぎ申し上げます。昨日伺いました品、今朝から天文場所の柱跡を掘っていましたら、確かにみつかりました。早速村役人に持せますので、御面倒でも、よろしく御願ひ致します。

*猪川家は川之江村の大庄屋、時代により、他の二家と相次いで努めてきた。

*三好家は、大庄屋同格の家柄である。

*当賀、(九月九日は重陽の節句に当る)

*役用記は、川之江村大庄屋所の公用記

として、寛延元年(一七四八)から明

治四年(一八七二)迄続けられた。川

之江村地方の歴史を知る上で、貴重な

記録である。

文中にもある通り、落とし物は真鍮の丸い物というのみで、寸法などは一切書かれてない。これは一体何であろうか、測量用具のどの部分なのだろうか。元伊能記念館々長の佐久間達夫氏に御助言を頂いたところ、球体として道具の中にあるのは、象限儀で使う重錘ではなからうか、とのことであった。象限儀とは、星の高さを測定する器具である。その部分の重錘は、垂直線を知るために、細紐をつけてつるしていた。重錘の大きさは、直径

約九分(曲尺)というから、三センチにも満たない真鍮の球体であることが分かった。

忠敬先生は、晴れた夜はいつも星の観測に励まれていた事から、この重錘が見当たらないと、疲れた隊員達のさぞ、狼狽したことであらう。役用記を読みながら、落とし物が見つかって、私自身も、ほっと胸をなで下ろしたものである。

(いとう えいこ)

参考資料

新説・伊能忠敬(佐久間達夫編著)

愛媛県の地名・日本地名体系(平凡社)

小松藩会所日誌(伊予小松藩)

伊能忠敬(大谷亮吉著)



諸侯の依頼による地図の仕立て(二)

〔二八頁〕 関連

文化五年二月十九日、

堀田摂津守内山田綱治郎より伊能勘解由宛の書状。

・二月十九日、晴、白雲。四ツ前桑原隆朝へ行く。白木屋へ立寄る。八ッ過に帰宅。山田綱治郎より文通あり。

御手紙致啓上候。誠に昨日は参上仕緩々拜話大慶不_レ過_二之候。然者、中国地沿海地図之儀被_レ仰聞趣。委細、摂津守へ申聞候処、此方控之儀は、とてももの事に四国・九州地全備之上にて被_レ差出候様、被_レ致度旨に御座候。然る処、昨日も、及御面話候通、此節右地図見合申度奉_レ存候に付而は、此方より罷出入用之処相写候様可_レ致旨被_レ申付候。右に付ては書写し儀御頼申入参上仕入用之所書写仕候か。又は右図御控数日御許借も可_レ被_レ下哉。先者、此段御報承知仕置度、如此御座候。尚又、近日参上拝面萬々可得_レ芳意候。以上。

二月十九日

深川黒江町河岸通に而、堀田摂津守内

伊能勘解由様

山田綱治郎

諸侯の依頼による地図の仕立て (二)

渡辺 一郎

諸侯から、どのような形で地図の依頼がされたかについて、前号で平戸藩と島原藩の例をあげた。これは依頼した側の記録なので、忠敬側にも記録があるだろうとおもひ、佐久間達夫氏に忠敬在府中の日記を調べていただいたら、いろいろ出てきたので紹介する。

「文化四年三月一日、厳島、天橋立図、琵琶湖図持参暦局へ行く。それより桑原へ廻り八つ頃帰る」

第五次測量からの帰着は、文化三年十一月十五日である。この日までかかって特別地域図が仕上がり、暦局の高橋景保と、このときはまだ暦局に留まっていた間重富に下見させ、帰りに伊能測量の支援者桑原隆朝にも見せたと、考えられなくもない記事である。

「同年三月七日、午後、佐原屋庄兵衛、画図持参」

「同年三月十三日、昼後、佐原屋、厳島図持参」

佐原屋庄兵衛に軸装でもさせたのであろうか。

「同年三月二十九日、八つ半頃、厳島、天の橋立、琵琶湖、浜名湖図持参、浅草御役所へ行く。坂部、下河辺、高橋善助同道」

こちらは、全員揃って正式な提出のようである。これによると、景勝地を描いた特別地域図は、浜名湖もあった感じである。

「同年六月十二日、昼より桑原隆朝へ行く。それより近藤十蔵へ行く。六分図二紙（以下縦棒のみ）」

この桑原も地図に関係ありそうである。近藤十蔵は重蔵のこと。

六分図は中図である。書いてないが、中図二枚を近藤重蔵に渡したというのであろうか。蝦夷図と交換にでも。

「同年十二月十七日、大図、小図とも控えてきあがる」

「同年十二月十八日、四つ半頃、地図持参。桑原へ行き内見致し、それより浅草御役所へ相渡す」

文化四年の大図・小図の仕上がりと提出を記しているが、中図のことは書いてない。大図・小図は現存せず、記述のない中図のみ現存している。提出前に、桑原隆朝の内見に供している。隆朝は伊能測量の強力な後援者だったようである。

「文化五年一月二二日、桑原隆朝へ行く。それより林大学頭、堀田摂津守に暇乞いに行く。近藤重蔵に立ち寄る」

一月二五日出発の四国・大和路測量の挨拶である。係の堀田摂津守は当然としても、ここにも隆朝が登場する。そして近藤重蔵である。重蔵に何か期待するところがあつたような感じである。

文化六年一月一八日、四国・大和路測量から帰着。

「同年二月十九日、四国・九州地図の件、堀田摂津守内・山田綱治郎より伊能勘解由様あて文書届く」

「同年二月二二日、桑原へ行き、それより堀田摂津守殿内・山田綱治郎へ中国三分図持参、（以下、国々廻浦の際の贈り物の御礼に廻る記事が続く）」

桑原へ帰府の挨拶。摂津守に中国地区の小図を渡している。来信の内容は二七頁下段のとおりだが、景保が日本輿地図稿をまとめたのも、文化六年である。関係があるかもしれない。

「同年五月二四日、沿海大図八枚、山田綱治郎へかす。」

沿海地図大図を堀田摂津守の家臣に貸したことが書かれている。貸

し出された地図は写しを作られただろう。忠敬の在世中から、伊能グループ以外による写しが作られた感じである。

文化六年八月二七日、第八次（九州第一次測量）測量に出発。文化八年五月九日帰着。このあと、近藤重蔵のほかに間宮林蔵の来訪が頻繁に記録される。以下、地図の貸し出しに関する記事をひろう。

「文化八年八月十四日、田口弥三郎（唐津・水野和泉守家士・勘定吟味役）来る。大画面五枚借す。以下略」

大図を唐津藩に貸したのであらう。

「同年十一月二九日、山高山社碑銘、ならびに白川侯副碑銘、坂本林平より来る。且つ、此方より琵琶湖の全図遣わす。妙薫へ渡す」琵琶湖図の贈呈か。

「文化十二年五月八日、田口弥三郎方へ絵図九枚返る。又々四枚貸し遣わす」

「同年七月十三日、田口弥三郎より絵図かえる」

枚数が合わないが、貸出されている。

「文化十三年四月二八日、堀田摂津守様家来・山田平次郎来る。関東絵図五枚借遣わす」

担当の若年寄からの依頼である。大図であらう。

「同年六月五日、松平主殿頭藩中・荻定平来る」

「同年八月二五日、松平主殿頭藩中・荻定平来る。我等へ土産持参。渡邊啓一郎へ贈り物なり。国図のことを談ず」

島原藩からの接触である。地図依頼の打診とおもわれる。

「文化十四年四月八日、平戸侯、被来御逢度故、去五日御家来殿より申来候付、今日五つ半頃罷出候事。但し千秋彦左衛門、蒲生東

九郎、市山恒八 三人連名にて書状にて候。罷出候上にて蒲生東九郎取次被遊、御道筋測量里数等御尋被成る候事。尤御料理被下置候」

平戸侯の招待である。地図と一緒に保管されていた文書の記述を裏付けている。

「文化十四年六月十五日、松平主殿頭藩中・奥村嘉兵衛来る」

島原の文書にも奥村嘉兵衛は登場する。地図依頼の交渉か。

「同年六月二四日、平戸侯、被為下候付、今日八つ半時より舟にて罷出らる。保本敬藏同道」

平戸侯から舟遊びの招待である。松浦史料博物館所蔵の伊能図は殿様がみづから忠敬に依頼して入手したことがわかる。

「文化十四年九月二九日、青木勝次郎来たり、御用地図借用帰宿」この意味は不明。青木は自宅で作業をしていたのか。

「同年十月十二日、昼後、島原藩中・奥村嘉兵衛来る。菓子持参九間六分之間並びに島原領十間一分の地図を頼来る。三月まで滞留の由、それまでに仕立を頼帰。内にて致可遣旨約束す」

島原藩の依頼が具体化する。九間六分は縮尺九〇〇分の一、十間一分は縮尺六〇〇〇分の一の特異図である。残っていることを期待している。

「文化十四年十一月二六日、土州侯 地図之事御談す。世話役須藤甚右衛門来る」

土佐藩が出てくる。だが、間もなく忠敬が没し間に合わなかった。

伊能図探究 第一〇号

伊能日本図探究会 渡辺 一郎

伊能図見て歩き (三)

宮城県図書館 伊達文庫蔵 沿海地図 (図1)

宮城県図書館に伊能図があることを聞いて出かけたところ、学習院大学の中図だけしかないといわれていた領主名を記す中図五舗を實現して驚いている。

全体構成は、かつては学習院中図とおなじ五舗構成の沿海地図中図(普通沿海地図中図は三舗構成)と文化四年作成の畿内・中国図の組合せだったらしいが、沿海地図中図の蝦夷地と東北の北半分が紛失して五舗が残っているものと推測される。軸装ずみ。

彩色は明かるく、青・緑系より橙色を意識させられる。描図・文字は優良という程ではないが粗略ではない。地名とともに領主名を付記している。ただ記入の簡便のため、例えば山川飛驒守知行所と書くところを、山川飛驒守——の如く書き、△△村と書くべき所を△△——と書いている。その他も考慮して、地図の仕上げは、学習院大学の中図より簡略である。本図は仙台藩伊達家に伝えられたものであるが、入手又は作成の経緯は不明である。写本で針穴はない。虫食いは多少あるが保存は良好である。蝦夷地・奥州北部が何故無いのかもわからないが、もしかしたら、明治維新の後の奥羽戦争で持ち出されたのかもしれない。

合印は、宿場○、城下□、天測地点☆、郡界●、湊◇、神社ハ、寺

院△とも描くが手書きである。方位線、経緯線、接合記号もある。

沿海地図第三	奥州の南半分	一一二・八×二〇四メートル
沿海地図第四	東海・東山の東半分	二〇六×一二二・五メートル
沿海地図第五	東海・東山の西半分	一七七×一二三・四メートル
沿海地図第六	畿内(奈良盆地含む)	一二七×一一三メートル
沿海地図第七	中国沿海	一二六・五×二〇七・五メートル

イタリア地理学協会蔵 伊能中図 (図2)

概略を表紙写真について述べたので、寸法と八舗の構成だけを示す。

蝦夷地	一三〇・〇×二〇八・五メートル
東北の北部	一一二・五×一九一・〇メートル
東北の南部	一〇四・〇×一九二・〇メートル
関東	一八一・五×一二二・五メートル
中部	一七八・〇×一二五・〇メートル
近畿	一四〇・五×一二二・〇メートル
中国	一三五・〇×一七一・五メートル
四国	一二〇・五×一五〇・五メートル

八舗の中図の構成は図二のとおりで、近畿は沿海地図と文化四年に上呈の中図・畿内沿海図が重複している。識語・凡例はカナ混り文で達筆である。

長崎国立博物館蔵 伊能諸図 (図3)

沿海地図 小図(軸装、二五二×一四一センチ)

描図形式、書体は国立国会図書館の地図室にある堀田家伝来の沿海小図とよく似て優良。虫、傷全くない。緯線(緯度記入し経度記入なし)、方位線はある。表示記号は天測の☆を含めて全て揃う。凡例の



図1 宮城県図書館蔵 沿海地図(部分)

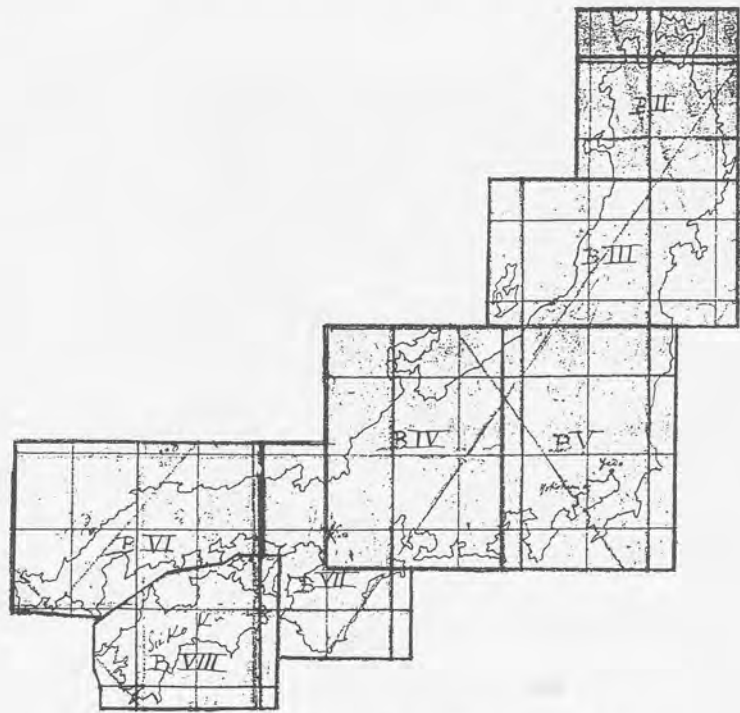


図2 イタリア地理学協会蔵 伊能中図の構成

文字は非常に達筆である。高橋景保、吉田勇太郎の識語と各地への里程表はない。これらは元々アクセサリーなので省略したか、天文方の原図になかったかも知れない。表示記号は手書きでなく押印を使っている。軸装の際に北と南が入替わり北が下になっている。元折本。針穴はない。写図の時期の記入はない。昭和28年峰文庫より購入された。

伊豆七島図 中図（軸装 一六〇×四八センチ）

伊豆七島中図は、神奈川県立金沢文庫と、大谷亮吉氏の子息英一氏の所蔵が知られていたが、本館蔵の中図は島の内陸部まで彩色された美麗なものである。

軸の始まりに左の文言が記されており、大村藩士峰源助が高橋景保の弟・渋川助左衛門の九段の司天台に留学中に、許可を得て写したものである。嘉永七年の年記がある。

此図及日本地図江都九段坂司天台所蔵之祕図而素禁他見嘗當隻月晒書偶得一見意欲之而不敢言然以謂不請之於今而悔之於後既無及且縱出千余求之於他焉可復得哉遂敢請之先生幸善志速許之巨戒日謹勿洩矣不勝雀躍欣然謄寫因聊記其故藏諸家而傳不朽云爾十時

嘉永七年甲寅夏六月

峰源助源潔謹識

標題は左のとおりである。

自豆州賀茂郡吉佐美村 沿海 並 伊豆国附七島図 以曲尺六分
至相州足柄下郡小田原宿 為一里

四国全図（文化六年上呈中図）一〇三×一三四センチ 軸装

山景の描図は丁寧で、彩色は濃い。緑色はやや暗い色。若干の退色がある。緯線はあるが経線はない。方位線はある。合印は揃っている。文字達筆。虫少し有、右縁に傷みが少しあるが、保存完全。西を上

する。合印の凡例がある。

琵琶湖図 卷子本（五八×一〇〇・五センチ）

安政二年二月、峰源助写。汚れ（カビ）はなはだしい。合印ほとんどなし。文字は達筆。

実測奥州松嶋図 折本（八九×一〇四・五センチ）

文政二年二月、峰源助写。松島部分だけの大図である。裏打なし。



図3 長崎市立博物館蔵 伊豆七島図（部分）

伊能忠敬研究会入会案内

一、本会は、つぎのような活動をおこなっています。

(一) 会報の発行(当面、年四回)

各号三六頁。伊能図探究を継承するので、初号は第七号から。

(二) 年次大会・例会の開催

年一回の年次大会と例会を開催します。一般講演、各種の発表のほか史料、伊能図の展示説明等を併催します。

(三) その他付帯する事業。

投稿規定

・会員の投稿を歓迎いたします。原則として一回の掲載は四頁以内とし、越える場合は分載します。原稿多数の場合、採否は編集委員にお委せねがいます。また、編集委員から一部変更をお願いする場合があります。

・一頁は、二段組三二字×二六行×二段で一六二二字、三段組二〇字×三〇行×三段で一八〇〇字です。タイトルと写真はこの中に含めてください。また、提出した原稿の返却は致しません。

二、入会方法、会費等

(一) 入会申込は、住所、氏名、職業、専門、電話番号、FAX番号などを書いた申込書を左記にお送りいただくとともに、小為替または銀行送金等で年会費六千円を御送金下さい。

(二) 申込先 〒一六二 東京都新宿区下宮比町二の二八の五〇四
飯田橋ハイタウン五〇四

伊能忠敬研究会(事務局 渡辺一郎)

(三) 送金先 東海銀行飯田橋支店 普通一〇八七五四八

伊能忠敬研究会(イノウタダタカケンキュウカイ)あて

三、本誌の編集委員はつぎの各氏にお願いしております。

安藤由紀子(元国会図書館憲政資料室)・伊能陽子(伊能家)・香取樽良(前佐原市教育委員会教育次長)・小島一仁(佐原市史編集委員)・斉藤 仁(学習院女子短大)・佐久間達夫(元伊能記念館館長)・清水靖夫(立教高校教諭、法政大学講師)・芳賀 啓(柏書房取締役編集長)・渡辺一郎(伊能日本図探究会代表、会社会長)
(五十音順)

編集後記

●日本計量史学会の岩田副会長に第一回例会の歩測のデータを分析した貴重な論文をいただきました。御礼申し上げます。
●佐原例会の小島一仁氏の名講演は、テープ原稿に手をいれていただいて、今号と次号に分載します。ありがとうございます。

●歩測名人・歩測達人の方々おめでとうございます。

●連載している測量日記は今回は休載します。

●渡辺事務局長と佐久間達夫氏が、昨年末の十二月二日にNTVの一時番組組「五十才からの人生への出発、伊能忠敬」に出演して好評でした。

●会員の鳥瞰図作家・永野達代さんが「こどもの国の今昔」という題で、ゼンリン主催のオリジナル地図展に出品します。二月七日から九日まで。会場は横浜ランドマークホール。

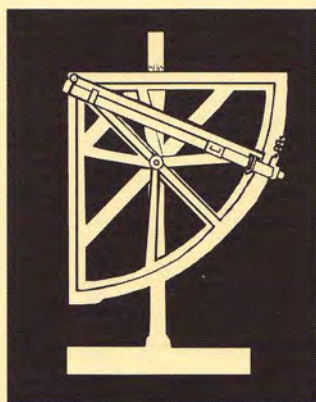
●和算ならびに江戸末期の天文学についてお知恵を拝借できる方、ご連絡をお待ちしています。

(芳)

THE INO TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INO'S MAP AND WRITINGS

No.10 Winter 1997



A Story of My Experiences on Ino Tadataka	YAMAZUMI Masami	1
A Report on Sawara Meeting	KATORI Kiyoshi	3
LECTURE (At Sawara Meeting)		
My Encounter with Ino Tadataka	KOJIMA Kazuhito	4
REPORTS		
The First Experiments of Surveying on foot	IWATA Shigeo	10
Contest Results of the Competition of Walking Survey	EDITORIAL Staff	12
News Items on Sawara Meeting and Other Notices	EDITORIAL Staff	13
Ino Tadataka & KAN Sazan	TAKEDA Takeshi	14
A Quick Stroll at Sawara City	ASAI Kyoko	15
Difficulties in Dealing with Ino Tadataka	UEDA Koichi	
Ino's Maps and official Maps of Modern Japan	SHIMIZU Yasuo	16
MATERIALS		
Family Document		
Letter from SAKABE Teibei, 3	ANDO Yukiko	20
Process of Making Ino's Grave at Genkuji Temple	INO Yoko	24
Regional Materials		
Lost articles of Ino Land Survey Team	ITO Eiko	26
Making Maps by the Request by Lords, (2)	WATANABE Ichiro	28
THE SEARCH FOR INO'S MAPS		
Ino's Midle scale Maps in DATE Collection, Miyagi Prefectual Library	WATANABE Ichiro	28
Ino's Midle scale Maps in Geographical Society of Italy		
Ino's Maps in Nagasaki Municipal Museum		
OTHER NEWS		33

Edited and Published
by
THE INO TADATAKA SOCIETY